

論 説

ナインイレブン テロ 9.11 恐怖襲撃の様々な既視感()

夏

剛

4. 年輪・祖型・^{ぜんしゃのてつ}「前車之鑑」の蓄積・遺伝・派生と更新・変異・風化

林彪は遼瀋戦役後に華北へ挺進する際に、自分は「入関」(山海関の内側¹⁹⁰)に入る)までは無敵の将だが、関に入れば漢賊・曹操に成つて了うのだ、と参謀長・劉亜楼に冗談を言った。公称百万の東北野戦軍が実勢83万人である事は、奇しくも赤壁に臨んだ曹軍と一緒の故だ¹⁹¹。驕傲・「自満」(慢心)への自戒が効いた所為も有り、負けて「賊軍」に転じる結末は避けられ「官軍」と成った¹⁹²)が、政治委員・^{らえいかん}羅栄桓の名と曹操が征服した東胡族の^{うかん}烏桓¹⁹³)と重なるのも、「^{ホワン}桓」と同音の「^{ホワン}環・^{ホワン}還」の連続・反転・回帰を思わせる。

林の呟きを最初に解せなかった劉は、^{くだん}件の曹軍の数を訊かれて虚・実の両方を答えた。「不假思索」(考えもせぬ)程の熟知¹⁹⁴)は、歴史を鑑と為す意識・蘊蓄の豊かさの証だ。毛沢東も戦争中の移動で多くの本を棄てたが、『三国志演義』は『十八史略』と共に最後まで手元に置いた。彼の「用兵(料事)如神」(兵を用いる[事を思慮する]は神の如し)¹⁹⁵)は、祖型に対する「爛熟於心、信手拈来」(心に爛熟し、自在に引き出せる)¹⁹⁶)の把握に負う処が多い。此の8字熟語の字面が示唆する様に、爛熟した智慧は現実を占う信頼性が有る。

建国後の中共の政策決定の流儀には、「務虚」(理念の構築・意思の統一) 「务实」(実施の策定・実践の移行)が有る。毛の「実践出真知」(実践から真の知識が生まれる)の持論に照らして、「不假思索」の字面に因んで言えば、露払いの「務虚」で好く登場した西欧共産主義の原理は、中共にとって二重の意味の「假」(仮)の性質を持つ思索だ。「耳聴是虚、眼見是实」(耳で聞くは虚、眼で見るは実)と俗に言うが、マルクスの言説は一見に如かぬ百聞の如く、地政学・地文化的距離や発展時差等に因って実感の乏しさは否めない。

「文革」の宗旨には「修正主義に反対し、資本主義の復活を防止する」と有ったが、後半の方は国民党時代を半封建・半植民地社会とする中共の史観と自己撞着に成る¹⁹⁷)。其の虚構の大義も一種の「紙老虎」(虎の張り子)¹⁹⁸)だが、資本主義と其の高度な生産力は建国初期の中

国人にとって、「水中月、鏡中花」めく「虚幻的現実」の観も有った¹⁹⁹⁾。『資本論』3巻刊行の1867, '85, '94年の百年後は、其々毛・鄧・江の時代であったが、マルクスを尊崇する中共の指導者には、彼の此の主著の理解者は恐らく無に近いはずだ²⁰⁰⁾。

温家宝総理は2003年末の訪米中に、中国は米国に追い付くまで百年要ると述べた。競合相手^{ライバル}の警戒を解く為の自己卑下とも取れる²⁰¹⁾が、貧困の地域・人口が猶多い中国の実情や、楽々と富強を再生産して行く米国の勢いを観れば、中国人好みの世紀単位や「百年孤独」²⁰²⁾に基づいた恣意の見通しとは言えぬ。四半世紀前の鄧小平は米国の宇宙航空中心で模擬操縦を試みた時、正に小学生めく不慣れを見せた²⁰³⁾。鄧が訪米で演じたカウボーイ姿²⁰⁴⁾は、江沢民体制が打ち出した西部開発戦略と共に、米国の昔の西部開拓と重なる。

更に次世代の胡錦濤は大西部より東北部の開発を優先し、毛沢東の重工業重視と鄧小平の効率至上への継承を印象付けた²⁰⁵⁾が、上等な「西装」(背広)を着こなし^{イメージ}た胡の形象は、専ら人民服だった2人の世代とは隔世の観が有る²⁰⁶⁾。但し、小ブッシュの前で『真昼の決闘』の台詞を得々と披露した小泉首相の純真な西部劇好き²⁰⁷⁾と違って、鄧のカウボーイ姿は「収買人心」(人心収攬)の商魂の所産とも見て取れる²⁰⁸⁾。胡の服は「推銷員」(販売促進係)の揶揄を受けた²⁰⁹⁾が、装いの違いを超えた本質の一貫も見過ごせぬ。

毛・鄧・江・胡の移行は「酷」^{クール}の冷厳 精彩の「重点転移」(重点の転移)¹⁰⁾を見せたが、胡錦濤体制は母胎たる鄧小平時代の遺伝因子を多く持つ。彼は総書記就任の10年前の1992年10月の第14期党大会で、最年少の49歳で政治局常務委員会に入り内外を驚かせたが、更に10年前の第12期党大会で総書記に選ばれた胡耀邦は、胡啓立・胡克実と共に並ぶ共産主義青年団指導者として、同じ「共青团学校」出身で同姓の彼の先輩に当る²¹¹⁾。彼と同じく鄧の眼鏡に適った胡耀邦は、建国後初めて背広の着用に挑戦した中共党首だ。

周恩来は「三羊(陽)開泰」(三羊[陽]が泰平を開運する)の縁起を担いで、朝鮮戦争中の志願軍主將に楊得志、楊成武、楊勇を当てた²¹²⁾。天安門事件前後の軍の実権を握った「楊家将」(楊尚昆・楊白氷兄弟)と其の「3楊」の重畳は、胡錦濤が「3胡」の耀邦・啓立に次いで権力の頂点に入った展開²¹³⁾と重なる。「3胡」の中の「領頭羊」(引率羊^{リーダー}・指導者格)・耀邦の総書記就任は、1982年9月12日の事である。恰度^{ちょうど}29年前の同じ日に第1書記と成ったフルシチョフと同様、2人の改革志向の反逆児の失脚も既視感がある。

フルシチョフ失脚の翌々日の中国の核実験の初成功は、両国の力関係の逆転の起点と思えるが、其の歴史の連環に絡んだ暗合として、第11期党大会閉幕の25日後の1977年9月12日、『解放軍報』が中国の核弾頭搭載^{ミサイル}導弾の発射実験の成功を発表した²¹⁴⁾。画期的「両弾」結合²¹⁵⁾の宣言の恰度^{ちょうど}5年後に新体制が誕生したが、生産力の発展を至上視する最高実力者・鄧が中央軍委主席の地位に座った事と合わせて、「四つの近代化」の農業・工業と国防・科学技術の両輪や、毛沢東時代の軍産結合・鄧小平時代の産軍相乗^{しるし}²¹⁶⁾の徴に成る。

1982年9月12日が特筆すべき理由は、1943年以來の党中央主席の職位の廃止にも在る。党首は初代の陳独秀から6代目の張聞天までが「総書記」で、毛から「主席」と改名し華国鋒に継承されたが、其の椅子の撤去は「脱毛」(脱皮。脱毛沢東²¹⁷)の意思表示と観て能い。毛の路線に絶対な忠誠を説く華の決定的失墜²¹⁸は、1つの時代の閉幕の信号とも捉え得るが、華が江沢民時代に導入した定年制の上限を超えても中央委員会に居続け、胡錦涛体制誕生の際に漸く退場した事²¹⁹は、歴史転換や世代交替に必要な時間を思わせる。

独裁の名残^{なごり}の強い「主席」が「総書記」に取って代られたのは、鄧小平が総書記を務めた'56年体制の再来の含みも有る。第8期党大会で選出された総書記・鄧は序列第6位に過ぎず、「文革」で抹殺された此の職名が胡耀邦に与えられた事は、表面的党首に対する実質的領袖の軍委主席の優位の徴に映る²²⁰。初期の「総書記」はソ共を先取りした党首名²²¹なので、今次の「復蘇」(復活・蘇生)は字面通り蘇聯(ソ連)流の復活とも言えるが、毛の階級闘争志向と訣別した後の2人の総書記は、歴代総書記の失脚の宿命²²²を踏襲した。

毛は党中央革命軍事委員会主席を経て党主席に成り²²³、鄧は党首の地位を求めず軍委主席の座を手放さなかった。何れも熱戦・冷戦時代の武力の優位に因る二重権力構造だが、林彪も江沢民もNo.2に抜擢された際に喜より憂が強かった²²⁴のは、危険を示す「前車の鑑²²⁵」が中共と中国の歴史に多い故だ。江が総書記の任を円満に全うした結果は、正・反の何方道^{どっちみち}²²⁶も政争に陥って^{しま}了う「怪圈」(メビウスの環)の打破を意味する。不吉な陰影に怯えざるを得ない常態の終焉も、巨大な転換であるだけに悠長な移行が必要だった。

鄧-胡体制の発足は前年の6月29日に遡れ、其の日の中央総会では華の党副主席への降格、胡の党主席と鄧の軍委主席の就任を可決した。屋上に屋を重ねる構造は党・軍の大権分散²²⁷の可能性も含めたが、2日後の建党60周年²²⁸の節目に相応しい指導部改組だ。鄧の肝煎りで採択された「建国以來の党の若干の歴史問題に関する決議」²²⁹は、毛沢東時代の総括と「文革」の総清算に成った。過去に区切りを付けた其の文献に対して、江沢民が建党80周年記念集会で打ち出した「三個代表」論は、新志向²³⁰の指針の性格が強い。

中共を最も広範な人民の利益、最も先進的生産力、最も高度な民族文化の代表とする規定は、毛沢東時代と其の後の「総凄惨・総清算」に対する「総生産・総精彩」の合成物²³¹だ。共産党の「全民党」(国民政党)化や資本主義・「知本主義」²³²の道を開いた此の理論は、言わば「国民総産党」²³³主導の「国民総産値・国民総産智」発展の青写真を提示した。労働者階級の前衛隊から中華民族の前衛隊へと属性が変更した事は、革命の変容とも自滅的変質とも観られたが、斬新に映る主張は修辞はともかく中身には既視感がある。

「三つの代表」論で可能に成った資本家の入党は、27年に亘った毛沢東時代と更に約20年続いた後毛沢東時代^{ポスト}²³⁴の常識では、「離経叛道」(經典を離れ正道に背く)²³⁵の観が強い。然し、掟破りの様な新「経」は実は過去の異説の「翻版」(焼き直し)で、「邪道」の謗りを受け

た新方向の道筋は先代で既に用意された。鄧小平が提唱した「先富」(一部の人・地域が先に豊かに成れ)論²³⁶も、従来の平均主義を破る驚天動地の軌道修正だが、別の「先富」の布石として'93年に、資本家出身の新財閥・宋毅仁が国家副主席に成った²³⁷。

鄧が依拠した「紅色資本家」(赤い資本家)肯定論²³⁸は、劉少奇が建国初期に言い「文革」中批判された論調だ²³⁹。劉・鄧は党内最大の「走資本主義道路的当権派」(資本主義の道を進む実権派²⁴⁰)や「修正主義者」と断罪されたが、全権を握った後の鄧の社会主義堅持+資本主義容認は、間違い無く封建的社会主義に対する修正だ。宋毅仁を異人種の如く扱い難かった毛²⁴¹)と対照的に、劉・鄧の生涯の伴侶は大資本家の娘である²⁴²。鄧小平時代の「旧社会・資本主義の復活」²⁴³は、劉の道半ばの志であったのかも知れない。

鄧が先頭に立った「反右派闘争」の1957年、宋は思想粛清の重点地域・上海の副市長に起用された。否定 肯定, 想定 現実の反転は、其の時に既に種が撒かれた。鄧は'78年12月の中央総会で変革路線を承認させ、翌年に宋に中国国際信託公司初代総帥(董事長兼総経理²⁴⁴)への就任を要請した²⁴⁵。其の2昔前の先行的変化として、'58年12月に毛の国家主席辞任が了承され、翌年に劉が後任に選ばれた。二重権力構造は間も無く破綻し彼は10年後に獄死したが、其の20年後の天安門事件で改革・開放も暗闇に突入した²⁴⁶。

2002年に誕生した党指導部の「全新」(真新しい)イメー
ジ
形象には、全員の米国流の背広姿が特に目立った。鄧は有名な「一個国家、兩種制度」の講話(1984年)で、「中華儿女」は服装や立場が違って民族の「自豪感」(優越感)を共有すると述べた²⁴⁷。食・住・行(交通)の前に出る衣は人格の符号なり得る故に重要で²⁴⁸、背広の急速な普及も中国の目覚ましい変貌を物語っている。服装文化の定着にも1世代は掛かるが、不似合いを顧みず逸早く挑戦した胡耀邦²⁴⁹)の挫折は、「商社マン」と皮肉られた今日の瀟洒な勝者の肥やしに成った。

国民服の株を奪った「西服」(背広)の台頭と定着は、「西(洋)化」・「全球化」²⁵⁰)の前兆と結果だ。「時装」(ファッション)の字面²⁵¹)通り時流を映す服飾の変容は、胡族の動き易い服を取り入れた趙武靈王の変革に比せられた。戦国時代の胡服導入の故事²⁵²)が背広擁護論者に引き合いに出されたが、中国人は好く祖型を指針として援引するか、正当化の根拠として祖型の「実構」(筆者の造語。「虚構」の反対語で確実な構築の意²⁵³)を図る。其の思考様式・行動文法にも、観念・言語の操作で志向・幻想を現実にかす魔力が有る。

満族の「旗袍」(チャイナ・ドレス)が中国の民族衣装の代表と成った変化は、紀元前4世紀の同じ周辺少数民族の胡服の導入を彷彿とさせた。「西服」は其の延長に在る歴史の「重演」(再演)と言えるが、一連の重畳は中国・中華文化の重層や、積み重ねに因り重量が増す年輪の特質を浮き彫りにする²⁵⁴)。其の底流の暗合を裏付ける様に、転型期²⁵⁵)の1980年代の2人の改革派総書記の姓は、奇しくも趙武靈王の胡服採用に符合しており、胡耀邦の向う見ずの猛進と趙紫陽の失脚前後の不退転は、騎馬民族的蛮勇・愚直を印象付けた²⁵⁶)。

天が作って置いた連環として、劉少奇の抗日戦争中の暗号名・「胡服」が思い浮かぶ。軽装行軍の寓意²⁵⁷は「西服」の利便性と通じるが、「服装デザイナー」(デザイナー)ならぬ「改革の総設計師」²⁵⁸・鄧は、資本家の活用も含めて「胡服」こと劉少奇の「藍図」(青写真)を実践に移したわけだ。21世紀初頭の党の「顔」の面々の格好好きさは此处で、図らずも「出藍之誉」の変種に成る。変名・「胡服」の登場の頃に生まれた胡・温の約60年後の党・政府首脳の就任は、干支周期の意味と絡んで更に様々な既視感や擬似既視感を覚えさせる。

鄧小平・胡耀邦体制が始動した1981年は、60年前の建党の1921年と共に、陰陽道では変化が起き易いとして「革命」の異名が付く²⁵⁹。鄧は改革を一種の革命と主張した²⁶⁰が、更に前の辛酉の1861年は洋務運動の開始を以て、富国強兵を図る晩清の変革の起点と成った²⁶¹。鄧の改革・開放を賛否の両方から新洋務運動と捉える向きがあったが、19世紀の近代化・^{グローバル}全球の気運・実績が突出した江蘇・安徽から、新千年の交を跨ぐ指導者の江沢民・胡錦濤が生まれた事は、地政学・人類地文学的価値の蓄積の開花と見て取れる。

時間の循環の含みを持つrevolutionは、「革命」の東洋の意味と妙に通じる²⁶²が、近代中国の3回の辛酉の変革は干支周期の断・続の両面を思わせる。指導部の「西服一律」²⁶³は民国以来の国民的「中山装」(孫文服)²⁶⁴や、建国前後の中共が好んだ「列寧装」(レーニン服)²⁶⁵への揚棄(止揚²⁶⁶)だが、1924、25年に逝った露西亜革命の父と国・共両党の「国父」²⁶⁷は、服装様式に由る後世への支配が結局60年未満だった。大陸の脱「中山装」や陳水扁の「總統」就任演説の孫文外し²⁶⁸は、レーニン銅像の倒壊にも近い。

歴史の既視感は生成、蓄積、派生、再現の反面、此の様に更新、変異、稀薄、消失も多い。「止揚」の字面と発想の通り、仮に退場しても別の既視感へ遺伝子を遺す場合が儘有る。毛沢東は莊子等の宇宙観を基に「物質不滅」の持論を展開し²⁶⁹、素粒子研究に寄せた哲学的関心は海外の学界で感激され、彼の姓を冠す「毛粒子」の名称まで提案された²⁷⁰。「不生不滅・亦生亦滅」の対立・統一²⁷¹に於いて、毛の弁証法的「粒子」観は『聖書』の箴言に通じる。「一粒の麦が死なねば只一粒の儘で、死ねば豊かに穂を結ぶ様に成る。」²⁷²

2002年の党大会を期に華国鋒が政治の舞台から去ったのは、建党前生まれの世代の「全退」(完全引退)²⁷³を意味する。華は党の「同齡人」(同年齢の人)であり、中共創設者の1人・毛の隠し子だとも噂された²⁷⁴。故に「党的兒子」(党の息子)と言うよりも、「天之驕子」(天の寵児)や「龍種」(龍[天子]の種)に相応しい²⁷⁵。党の還暦の前夜に彼が頂点から転落した事は、干支の一巡に合致した党の「脱毛」の信号だ。60歳で直ちに「耳順」²⁷⁶に成ったわけではないが、耳に逆らう忠言を許容する風穴が出来たのは此の頃だ。

鄧小平は難聴・独断の質²⁷⁷から異論を黙殺しがちで、胡耀邦・趙紫耀は『莊子』の渾沌の死の寓話²⁷⁸と逆に、密室政治に穴を開けた途端「中央の王」の逆鱗に触れ頓挫した。但し、其の犠牲も落ちて死んだ麦の如く再生・繁殖を見せた。『西遊記』の難関数に当る建党の81年

後に誕生した「新長征」の「帯頭羊」(引率羊²⁷⁹)には、2人の「秘蔵っ子」²⁸⁰・温家宝が居る。彼が周恩来と同じ名門中学から出た事は、「龍種」の連綿を思わせる。党指導部の高学歴は又、北京大学教授が初代総書記を務めた中共の先祖返りの観が有る。

御披露目に臨んだ政治局常務委員面々の背広と赤いネクタイ²⁸¹は、「清一色」²⁸²の中山装の反転や「一片紅」(赤一面²⁸³)の名残と思える。軍人が入らぬ点で1956年体制への回帰²⁸⁴も感じるが、「毛服」は人民服ならぬ軍服だ²⁸⁵とすれば、軍服姿の消失は「脱毛」完結の証に映る。第1 ^{ボタン}鈕を締める中山装と軍服は儒家の矜持と兵家の威厳を持ち²⁸⁶、背広のV形襟は開放の象徴と捉え得るが、逸早く背広を試した初代上海市長と2代目外相・陳毅元帥は、Vの戦勝の隠し味と国防緑の平和の要素を「上海闊」に遺した²⁸⁷。

鄧は改革・開放元年の初頭に栄毅仁に対して、行政命令も受けぬ全権を彼の投資会社に与えた。外資と元工商業者の寄与を引き出す旨の其の談話は『鄧小平文選』に収録された²⁸⁸が、日付の1979年1月17日は13年後に歴史の連環の1点に変わった。第2次改革・開放元年の'92年の鄧の南巡は、同じ日に始まった事である。歴史の既視感とは2種類の経路で出来上がる物と思えるが、印象に残った過去の事象が発生源を為す順次派生の型に対して、此の例の様に、逆に強烈な出来事の触発で既出の日常に特殊な意義が付される場合も有る。

南巡開始の日付が興味を引くのは、湾岸戦争勃発1周年に当る為だ。日を合わせた時機設定は立証できない²⁸⁹が、人為を凌駕した天意が読み取れる。'87年と'95年の同じ日の神戸発のエイズ騒動²⁹⁰と大地震も、安全の弱点を突いた人災・天災で繋がり合う。阪神大震災と「沙漠の嵐」作戦とは接点が無いはずだが、映像で「神剣」の威力を演出した米国当局と、中継を観ても危機感が湧かなかった日本政府との違いは、4年の時間差より遥かに大きい能力差を見せ、曾ての敗戦の既視感と重なる日本の再度の敗北の予感に成った。

事象や言説が自覚や意図の有無に関わらず、現実の展開に連れて既視感や予見と化す例は、1月17日辺りを観ても色々有る。'87年の其の前日の胡耀邦更迭²⁹¹は、此の日の日本エイズ元年開幕や8年後の阪神大震災と対照的に、共産党中国の最大な不安定要因が政治に在る事を示した。涙を奮う事も無く胡を斬った鄧はやがて若干後悔を覚えた様で、南巡の動因にも胡並みの情熱を見せぬ新指導部の微温への苛立ちが有った²⁹²。5年前の政変劇の日とほぼ吻合した旅立ちは計算の結果でなくても、自省の暗示として成り立つ²⁹³。

5. 「地縁政治緊張」と「地文化^{リスク}危険」; 恐怖・激動・災厄・再生の等高線

阪神大地震は衝撃が全国に走り人々の心に影を投げた点でも、救援活動の不備や海外の援助を謝絶した自閉でも、1976年の唐山大地震に既視感がある²⁹⁴。俱に数十日後に大激震(毛沢東死去と「4人組」逮捕、地下鉄サリン事件と超円高)が襲来した事も、社会の地殻変動を兆

した両者の共通項だが、唐山大地震も8年隔てた歴史の連環を持つ。労働者・解放軍の清華大学進駐に対する紅衛兵の抵抗に業を煮やし、毛が学生造反派領袖を急遽呼び付け其の真夏の夜の夢を一喝で粉碎した²⁹⁵)のは、'68年の同じ7月28日の未明の事だ。

唐山は首都圏に在り後に北京・天津と共に経済成長第3極を成したので、例の災厄は東京大地震と阪神大地震の両方と重なる。国家の中枢に遠く離れた阪神の場合と違って、其の地文学的の変異は最大級の地政学的危険を露呈させた²⁹⁶)。唐山は日本占領下の1938年に清末以降の鎮から市に昇格され、「弾指一揮間」の38年後に一瞬にして天の悪戯^{いたずら}で廃墟と化した²⁹⁷)が、其の滅亡劇は別の形而上の意味も持つ。何しろ「唐山」は地理・行政上の固有名詞とは別に、華僑・「華裔」(外国籍中国系人)が中国を言う習慣の呼称でもある²⁹⁸)。

軍人作家・銭鋼は記録文学・『唐山大地震』の冒頭で、仏蘭西革命家・ロベスピエールの処刑(1794年)、第1次世界大戦勃発(1914年)、日本軍の北平占領(1937年)、仏が南太平洋で2回目の水爆実験(1973年)、という世界史上の7月28日の激動を引き合いに出し、結びではサンフランシスコ、リスボン、英国のポテンツァ南方地区、日本の十勝、中国の海城と唐山を例に、大地震が起き易い北緯40度線一帯の「恐怖の線」に触れた²⁹⁹)。唐山の悲劇は言ってみれば、其の時・空の「天網」めく「災厄の枢軸」³⁰⁰)の交差点に起きた。

女性エイズ患者第1号が神戸に出た事は、国際港の特殊性に絡んだ発病要因³⁰¹)を思えば、珍獣を嗜む食文化の故に広東が非典型性肺炎の発生源と成った事と同じく、人類地文学的危険^{リスフ}の存在を思わせる。「非典」(SARS)の次の「禽流感」(鳥インフルエンザ)と「硝煙無き第2次保健戦」³⁰²)の禽獣大量処分も、度々騒擾を起す香港流感和1997年の香港の禽流感退治³⁰³)に既視感が有る。香港・露西亞と共に世界の流感3大発生源を成すアフリカは又、前世紀末の怪病・エイズの母胎とされ³⁰⁴)今も「重災区」(重度被災地域)の儘だ。

広州と香港は地理上「一衣帯水」の関係の典型と言え³⁰⁵)、地政学的には99年も別々の国の管轄下に在り、1997年の香港返還後も「一国二制度」で断層が続く。半面、「食は広州に在り」の定式と「食在広州 = 食在香港」の等式³⁰⁶)は、共通の「粵語」(広東語)に縁る越境の連帯感³⁰⁷)と共に、両地の人類地文化的一体性を示す。「口は禍の元」に当る中国の警句は、「病從口入、禍從口出」(病は口から入り、禍は口から出る)と言う。広東発の新型肺炎と香港の報道自由を巡る紛糾³⁰⁸)は、此の舌禍の両面と共に両地の絆を思わせた。

食は古来の中国で官民が「天」(至上命題)と為す基本的生活保障で³⁰⁹)、字形に俱に「口」を含む言語も「語 = 言 + 吾」の様に自我主張の手段だ³¹⁰)。天と人を繋ぎ即物的食欲と高次の表現欲を満たす2つの「口」の他に、孟子が人間の天性とした食・色³¹¹)に即して思えば、性欲の「別口」³¹²)が形而下・形而上の両面で浮上する。口鼻腔・咽喉から体に入る流感の発生源として香港と接点を持つアフリカが、性器接触や輸血感染の別途「進口」(輸入)で人を侵すエイズの「出口」(輸出)元³¹³)と成ったのは、示唆に富む現象である。

内戦時代の中共から天安門事件の学生まで『^{インターナショナル}国際歌』に共鳴した一因は、「起来，飢寒交迫の奴隷！」（立ち上がれ，飢寒に虐げられた奴隷たちよ）の雄叫びが，社会的・心理的・生理的実感に訴える力を持つ事だ。規約から『^{プロレタリア}共産党宣言』の文言や労働者階級の前衛隊の既定が消えた今次党大会でも，此の無産階級革命の戦歌は閉幕式で演奏された³¹⁴。漸く「温飽」（衣食の基本的保障）問題が解決に至った社会主義の初級段階に相応しいが，東半球北部の老大国と対蹠に在る西半球南部の炎熱大陸の貧寒は，「飢寒」とは微妙に異なる。

マルクスは倫敦の「陰冷」（底冷え）の中で『資本論』を書き，レーニン³¹⁵は露西亜の酷寒の中で革命を起こし，毛沢東は北方の僻地と首都で政権の奪取・維持の意志を強めた。国際共産主義運動は地球的規模と文化的視点から観れば，貧・寒度の高い北半球で発生・発展した必然性を持つ。同じ不毛でもアフリカは其と皮膚感覚の違いが有るが，『^{インターナショナル}国際歌』に代ったスターリン時代の国歌がブーチン政権の下で復活した³¹⁵。露西亜では，地球の縦軸で対極に位置する「災厄の枢軸」の一角との共通性は，冷戦後の中緊張・高成長で現れた。

ソ連解体後は超大国の軍備競争の高緊張が消えた代わりに，市場原理に由る個人・企業の生存競争が激化した。貧富格差の拡大に伴う絶対的・相対的窮乏の多発は，経験済みの資本主義諸国や移行経済の先発組の中国等では既視感が有る。其の結果10年で露西亜男性の平均寿命は5歳も減り60歳を切った³¹⁶が，謀らずもアフリカの短命傾向の増長と一対に成る。第2次世界大戦で払った死屍累々の犠牲に対して，「硝煙無き全球経済大戦」で非暴力に因る老累・病死が夥しく降り掛かるとは，南側の地の果ての果てし無い荒廃と通じる。

中国は不潔の故アフリカ並みの病毒発症地と見られる³¹⁷が，「東亜病夫」の不名誉は改革・開放後に決定的に挽回した。1984年に中国が初参加の五輪で強盛大国の印象を付け³¹⁸，同じ頃に国民のカロリー摂取水準が国際的合格線に近付いた³¹⁹。飢寒の二重苦の中で生まれた^{ウエンジャーパーオ}温家宝の名は「^{ウエンジャーパーオ}温加飽」の祈念が託された³²⁰が，還暦後の彼が総理と成った時の中国は逆に生産過剰に苦しんだ。毛，鄧，江時代の物の不足 欲の爆発 物の氾濫は，「欲」の字形の穀物不足の含みに合う展開だが，「谷＋欠」は驕傲の転落の契機をも内蔵する³²¹。

人類は飢餓時代に刷り込まれた本能から，脂肪類の摂取願望が先天的に身に付く。其が豊かな時代に禍して先進国住民や中国の「小皇帝」³²²の肥満を招いた³²³のは，「物極必反」（物事が極みに達せば必ず反転する）の通りだ。「素食」（菜食）本位から「暈食」（肉食）一杯への進化は皮肉にも，「少則得」（^え少なければ則ち得）の質素の後退，「多則惑」（多ければ則ち惑う）の眩暈の台頭を齎した³²⁴。今の日本の若者の性行動の衰微³²⁵も飢渴と飽食，禁欲と放縱の^{メビウスのわ}「怪圈」を映し，先進国予備軍の中国の将来の倦怠の前兆と思える。

流感源と共に悪名高い香港の「孤寒」（吝嗇）³²⁶は，飢寒故の金欠病よりも金満故の傾向だが，「経済動物」性も人類の本性の一部だ。地球規模の問題群の「重点転移」に伴って発生した^{エイズ}「愛滋」^{シャーシー}「沙氏」³²⁷は，延命の為の輸血や珍禽嗜好が感染経路と成る点で時空両面の不易性

を持つ。地域の貧富に拘らずエイズが世界最古の職業³²⁸)に由って広がった事は、常に既視感や擬似既視感を帯びた悲劇の定めを物語っている。世紀末と世紀初に蔓延した2つの不気味な怪病にも、百年の熱戦・冷戦に通底した血腥さと生臭さが嗅ぎ取れる。

SARS 退治の不手際で衛生部長(厚生大臣)と北京市長が更迭され、後者は江沢民系列の前者を下ろす為の「陪斬」(道連れ)と見られた³²⁹)。江時代の本格的開幕は首都の首領・陳希同に対する汚職摘発・逮捕なので、「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」の既視感がある。陳の犯罪は経済優先時代の所産とも言えるが、天安門事件の武力鎮圧を「誤導」した彼³³⁰)に対する肅清は「脱毛」の止めに似合う。「文革」の序幕を開いた北京市長・彭真の失脚の悲劇に次ぐ喜劇と悲喜劇は、政治から経済、人間安保への「重点転移」を見せた。

硝煙無き戦場に乗り込んだ新市長は天安門事件の際、20年の安定と引き換えるなら20万人の犠牲は止むを得ぬと唱えたらしい³³¹)。巡り巡って左様な辣腕派が首都統治を拜命したのは、「文革」前と「文革」中、毛・鄧時代末期の2回の天安門事件の時の北京市長の失脚³³²)と共に、政治の中心や権力の枢軸の所在地の地政学的危険^{リスク}を思わせる。鄧が死去の8年前に踏み切った首都戒厳と武力鎮圧は、毛が死去の8年前と直前に決断した清華大学攻略と天安門広場での実力排除³³³)の複合の様に、既視感と必然性を感じさせて来る。

毛・鄧の時代には北京首長の不安定と対照的に、工商の都・上海の首長が中央の頂点へ拔擢されたが、今の国際社会では中国は後者の様に経済専念の故「漁夫の利」を得ている。一方の米国は世界の中心を以て自任し政治に力点を置く分、言わば首都の自ずと高い地政学的危険^{リスク}を自ら一身に集めた。其の「世界憲兵」(国際警察)の高飛車な挙動は、「政」の「正+女」の字形の「正義の鞭」の含み³³⁴)に合わなくもないが、高い返報^{リターン}を追う為に負う高い危険^{リスク}で竹箆返しを食った展開は、第2の越南^{ベトナム}と成しつつあるイラクで示現している。

昨今の世界史には、1世代前に伏線を敷いた出来事が多い。冷戦終結の鐘は「国際インターネット元年」の開幕を飾ったが、此の情報技術革命の利器は核戦争危機下の1969年に米国国防総省が開発した物だ。中枢の被害を軽減させる為に末端へ疎開する通信手段は20年後、「第3の波」³³⁵)の前衛として颯爽と表舞台に上がった。中国の「4つの近代化」の半分を占める国防と科学技術の領域に於いて、米国は此の件でも総生産・総精彩の実力を遺憾無く示したが、国防総省は後に冷酷な心中攻撃³³⁶)で「酷」^{クール}の格好好さを落とす破目に陥った。

核戦争の難が去った後の慢心に因る機能・危険の集中傾向の裏目で、米国は9.11襲撃で中枢の大損を蒙った。艦艇・飛行機の密集配置で敵に好都合を与えた真珠湾事件は、此の意味でも既視感を埋めた前車の轍である。米国は日本の奇襲を察知できなかった60年前³³⁷)と違って、「千里眼」「順風耳」(地獄耳)³³⁸)めく情報探知手段を備えている。其でも目の下に潜んでいた「害人虫」(人を害する虫)を「掃除」し切れなかった³³⁹)のは、毛沢東の「華陀無奈小虫何」(華陀も小虫^{いかん}を奈何ともする無し)の感嘆³⁴⁰)を思い起こさせる。

毛は建党37周年の際の詩・『送瘟神』(疫病神を送る)の中で、此の比喻で日本住血吸虫病に因る華南中心の中国の被害を表わし、全国で700万人も患者が居た此の怪病の退治成功を讃えた。45年後の華南発の新型肺炎は世界で「瘟神」扱いにされたが、此の作品は歴史の反転と共に華陀の悲劇を考えさせた。関羽の骨を削り取り毒を除いた彼は、曹操の頭痛を根治する為に頭部切開手術を提案した処、暗殺の陰謀と勘繰られて獄死を強いられた。暴君の「瘟君」(疫病神)なる「心中賊」の所為で、稀代の名医は自分の命も護れなかった。

中国流で「千禧虫」(新千年の虫)と言う「^{コンピュータ} 2000年問題」も、「無奈小虫何」の滑稽さを見せた。製造元^{メーカー}の吝嗇の故の手抜きが特需を期待した仕掛けにしろ、近未来の想定を怠った慢心にしろ³⁴¹、正体不明な発生源は「心中賊」に帰着できる。人類の新千年祭に物騒な陰影を投げた不条理劇は、利と力の相関を思わせた。1961年1月17日、アイゼンハワーが異例な告別演説で産軍複合体の肥大を警告した。後任大統領の非業の死に関与が噂された其の幽霊は、30年後の同じ日に勃発した湾岸戦争で暴力 暴利の魔法を演じた。

朝鮮戦争の終盤から8年「力の政策」を推進した大統領の警鐘も、後の風化を待たず「強欲の枢軸」^{パワー}の能量全開で忽ち消えた。獅子身中の虫³⁴²の侵蝕で獅子も虫に変質したわけだが、別の「身内賊」として身から出た錆、即ち内部の腐敗や醜悪も目に付く。小ブッシュ大統領誕生の直前のフロリダ州得票再集計で、1枚1枚の紙のパンチ穴を点検する「無奈小虫何」の光景は、1960年代以来の投票方式の不備と落後を一挙に表面化させた。4年後に再任を狙う本人が選挙戦で曝された不名誉は、やはり約30年も昔の軍歴粉飾疑惑³⁴³だ。

対イラク武力鎮圧が売り物だけに形象の破壊が甚大だが、クリントンも越南戦争中の兵役逃避に関わらず大統領と成った。歴史は悲劇 喜劇、「正劇」(本格・厳粛な劇) 「鬧劇」(茶番劇)の形で繰り返すが、小ブッシュは前任者の既視感と共に先代への反転も見せている。越南戦争で何度も負傷した対立候補・ケリーは「^{クール} 酷」の格好好きが際立つが、老ブッシュも曾て対日作戦の英雄なのだ。天安門事件の余波で窺われた老ブッシュと鄧小平の波長の合致³⁴⁴は、朝鮮戦争の前の戦火の洗礼で米中の絆を結んだ歴史の長波の賜物だ。

胡錦涛の「胡服」の戦闘性の表現として、総書記就任前の訪米は真珠湾から始まった。江沢民への恭順の証として前例を踏襲したと観られたが、江が日米戦争勃発の地を第1歩に選んだのは、第2次大戦中の提携を建設的・戦略的^{パートナー}相棒³⁴⁵関係に生かす意思表示の色が濃い。温総理就任後の訪米の初日は選りに選って真珠湾襲撃記念日の12月7日で、一層其の意図を明確に示す形と成った。其処で気付かされた別の時空の連環は、胡・温と東北亜細亜の隣国の首領の金正日・小泉純一郎は、俱に太平洋戦争勃発直後の1942年生まれた。

盧溝橋事件の翌年に抗日戦争に身を投じた中共「38式幹部」が歴史の舞台から消えかかった頃、異名の由来の一部と成る日本軍38式歩兵銃の産地では安全・経済の神話が崩れたが、「第2の敗戦」の翌年以降の橋本・小淵・森3首相は揃って盧溝橋事件の直ぐ前後の生まれだ³⁴⁶。

彼等の歴史認識は胡・温・金・小泉と通じて、出生時の歴史が擬似原風景³⁴⁷⁾として付いて廻る節が有る。第2次大戦終結の翌年に生まれ新世紀の暁に大統領と成った小ブッシュ・盧武鉉も、天授の存在が個人の意識を規定し歴史を影響する好例と思える。

五木寛之は同じ敗戦後に朝鮮から撤退した江藤淳夫人から、「時代の同期生」と呼ばれて感銘した³⁴⁸⁾。彼は平壤で見聞したソ連軍の蛮行を万国共通の兵卒の暴挙とした³⁴⁹⁾が、歴史の普遍性に因る既視感と違って、其の場に居ないと追体験し難い感受も有る。「代溝」(世代の断層)で隔たる日本の戦中派、戦後派と戦無派、中国の内戦世代、「文革」世代と改革・開放世代、韓国の「50, 60(歳代)世代」と「20, 30世代」³⁵⁰⁾は、「社会大学」の授業や時代の雰囲気³⁵⁰⁾の共有に因り、其々の内部に擬似同族の連帯感が出来上がるのだ。

新世紀の韓国で親米反共の主流に代って親北嫌米の情緒が台頭したのは、世代交替の反映に他ならない。同文同種の中でも有る他世代との境界線は、地理の遠近や感情の親疎、利害の異同を超えて、色々な場合で様々な形で見られる。其々同年齢の胡・金・小泉と盧・小ブッシュは、言わば「世代等高線」³⁵¹⁾を以て繋がり合う。「人事有代謝，往来成古今。」(人事に代謝有り，往来して古今を成す。)³⁵²⁾時間や環境の推移・変容の中で其の生来の「等高線」から離れぬ在り方は、「与时俱进」(時と共に進む)³⁵³⁾の変種にも思える。

其の線は年輪と同じく原形を保ちつつ漸次膨らむが、先の者も後の者も天寿の枠内で人生を描くわけだ。幼 青 中 老の「必経之径」(必ず経る径)³⁵⁴⁾に由って、古今・東西の人や国の歩みには似通う処が多い。最期の毛沢東が感じ入った庾信の『枯樹賦』³⁵⁵⁾の様に、個我や世間の盛衰は樹の盛衰を彷彿とさせる。公人として指導者への生誕祝賀を禁じた毛は私かに自分の誕生日を大事にし³⁵⁶⁾、誕生日の公表を控える新世代の指導者は新千年紀も含む祝祭日の儀典に熱心だ³⁵⁷⁾が、発展を好み喪失を惜しむ心理は一緒である。

人間社会の大樹に刻まれた等高線は、微視・中視(等身大)³⁵⁸⁾的日次、月次や年次から巨視的世紀の環が有る。1989年の冷戦終結・東欧革命・「国際インターネット元年」は、百年単位の歴史の縦串の中で、1889年の明治憲法発布、1789年の仏蘭西革命、1689年の英国『権利宣言』・英仏植民地戦争と隣り合い³⁵⁹⁾、人類の長足の進歩の点描に成る。1976年の唐山大地震や12年後の中国金融動乱は龍年の災厄と視られた³⁶⁰⁾が、干支の中の「辛酉=革命」や主要国株式市場の9月暴落の習性³⁶¹⁾と共に、歴史の体内時計を浮き彫りにする。

銭鋼は自ら救援活動に携わった20世紀最大の地震の描破で『歴史上の今日』を引いたが、地理学的危険や地政学的危険と並ぶ時間的危険や歴史的危険が考えさせられる。北緯40度地域の「恐怖の線」に対して'89年群は「激動の等高線」と呼べるが、日々の機微はより肌理細かく多岐に渉る。7月28日の場合は彼が論拠に用いた出来事の他に好い事も一方有るので、1つの鍵言葉³⁶²⁾では概括し切れない。歴史は経緯の交差や山河の起伏の如く多角の形態や多様な方向で織り成された物で、其の重層を縦走すれば思わぬ断面や接線に遭遇する。

1999年4月25日、大勢の法輪功信者が中南海周辺で座り込み請願を敢行した。10年前に大学生集団も弾圧に抗議する目的で同じ聖域への突入を試み、此の日に指導部の強硬対処の決意を固めた³⁶²⁾ので、今次の示威で天安門事件の悪夢が甦ったのも無理が無い。法輪功が故意に狙った時機だとすれば、当局を震撼させた衝撃効果が取締の圧力として撥ね返ったのは皮肉だ。既視感が喚起・増幅する恐怖は其ほど強いが、中央所在地に迫った不穏な群衆行動を重視せず、'89年4月23日に趙紫陽が北朝鮮へ出掛けたのは暢気な失敗だ。

'86年末の学生運動と知識人の民主化要求は、鄧小平の敵意と胡耀邦の失脚を招いた。其の51年前に中共が指導した12.9学生運動³⁶³⁾や、鄧が57年に肅清の指揮を執った「右派分子」の異端言論の残像が、事態を深刻視し警戒する心理の点火線・添加剤と成った様だ。趙総書記は前任者の失脚が記憶に新しいのに樂觀したのは、政治闘争の嗅覚や歴史学習の成果が足りなかったとしか言い様が無い。留守中の4月26日『人民日報』社説の「動乱」断罪で「政治風波」が一気に高まったので、其の旅立ちは大きな転換点と成ったのだ。

自国と自身の安寧を疎かに朝鮮訪問を優先した彼の代償は、経済建設を後回しし朝鮮戦争に参戦した毛沢東時代の犠牲と二重写しに成る。共産党中国の平和・繁栄の構築・実現には、北朝鮮は謀らずも好事の邪魔を再三した。朝・越との善隣関係を形容する「唇齒相依」³⁶⁴⁾は鄧小平時代に消えたが、唇と歯は相互依頼の連帯だけでなく噛み合わせ摩擦も有るわけだ。毛の朝鮮出兵の決断は「唇亡齒寒」の故事に負う処が大きい³⁶⁵⁾が、唇が寒ければ歯は亡びると言う強迫観念は、今も対朝経済援助の負担を強いる呪縛であり続ける。

6. 「歳歳重陽、今又重陽」の「蝉聯・蛛絲」体連鎖・延続

連帯保証人の如く地政学的^{リスク}の危険の分担が余儀無くされた中国の立場は、生存環境に対する周辺国の重要性を思わせる。「韓信胯下之辱」と「孟母三遷」の物語では無頼漢と墓地、商人が忌避された³⁶⁶⁾が、其の不良、不吉、不義は揃って今の北朝鮮に見られる。国家は個人と違って隣人を選べないが、歴史の時間的流動性は其の空間的固定性に变化の可能性をもたらす。朝・中の「唇・歯」相依・相克が示す通り、同じ場所でも時間の経過や人間の営為に因り滄海の変が起き、時間軸では「怪圈」^{スピックスのわ}状の隣接・相関の組み合わせが生じる。

朝鮮停戦50周年の直前の2003年春、米英のイラク攻略で注目度が高まった北朝鮮の核開発を巡って、米・中・朝が北京で協議を行なったが、朝鮮代表の核兵器保有の表明で世界に衝撃が走ったのも、北朝鮮絡みの災厄が中国に降り掛かる因縁の4月25日の事だ³⁶⁷⁾。2000年南北首脳会談までに公表された金正日の唯一の肉声は、1992年4月25日に建軍60年記念式典で発した「朝鮮人民軍に栄光有れ！」だ。大衆集会で天へ発砲したフセイン大統領と重なる軍事独裁開発³⁶⁸⁾の首領の鶴の一喝は、11年後の核恐喝^{こだま}で回声を響かせた。

1997年2月19日に韓国で大物脱北者を狙撃した等、北朝鮮の特務機関は好く金正日誕生日の頃「花火」を打ち上げた³⁶⁹。中国でも建設工事を党・国・領袖への「生日献礼」とする例が多かった³⁷⁰が、裏返しの酷い「誕生祝い」も有る。劉少奇に対する党籍剥奪は公表の24日後、古稀を迎えた日に本人に通告され獄死を加速させた³⁷¹。其の暴挙の既視感の一齣として、^{フィリピン}比律賓からの敗退を雪辱するマッカーサーの執念で、「法的手続きの体裁を装った復讐」裁判の末、真珠湾襲撃4周年の日に山下奉文大将に死刑判決が下された³⁷²。

「文革」中に公安・検察・法廷は軍事管制下で健全性を失い、国家主席も法的手続きが無い儘で監禁された。其の暗黒な迫害は毛沢東の「無法無天」の放言³⁷³と共に、当時の「無頼統治・無法国家」の有様を裏付けたが、中共政権の法治の欠如を頻りに非難する米国も人治の一面が有った。米最高裁の判事10人全員は山下裁判の不服の訴えに対して、手続きは適正を欠いた物だと一致しつつも、軍事法廷に介入する権限が無いと判断した³⁷⁴。戦時体制の遺産とは言え、北朝鮮の「軍先政治」と同工異曲の「軍先裁判」は戴けない。

毛の「鉄砲から政権が生まれる」論は軍の特権意識を助長したが、中共建国の実情には適っている。亜細亜の軍事独裁を裁く使命感に燃えた「世界憲兵」気取りの米国は、憲法第2条で銃保持の権利を定めた³⁷⁵処に軍国的「銃前」³⁷⁶傾向が窺える。最高裁も遂に軍の治外法権の前で頸が垂れた1946年、^{クリスマス}降誕節前夜の北京で強姦事件を起こした米海軍陸戦隊兵士も、中国の官民の公憤に拘らず軍の庇護を受けた³⁷⁷。^{ベトナム}越南での虐殺や沖縄での強姦、韓国での轢死³⁷⁸等、米軍の数々の無頼・無法は中国人にとって其の再発に映る。

終戦翌年に件の盟国軍人が犯したの北京大学の学生なので、中国人は絶大な屈辱を覚えた。当の最高学府から創設者が出た中共の指導下の大衆示威に因り、「沈崇事件」は「抗議米軍暴行運動」の代名詞と成った³⁷⁹。身内を庇う為に自国の形象に^{イメージ}永世の汚点を付けた米軍関係者は、「小の虫を殺して大の虫を助ける」の逆で、1匹の害虫を生かして無尽の害虫を^{しま}孕んで了った。小我の癩癩の虫を殺せず³⁸⁰仇を殺した山下裁判に関しても2人の米最高裁検事は、法の偽装で飾った服讐は残虐な行為より大きな禍根を遺すと警告した³⁸¹。

9.11襲撃は米国で21世紀の真珠湾奇襲と糾弾され、「神風特攻」の方式・意志の再演も事実だ³⁸²。但し、日本軍の玉砕戦法は米軍の俘虜虐待に誘発された節が有るらしい³⁸³。「一個巴掌不響」(片手では拍手できぬ。片方では喧嘩に成らぬ)と言う様に、往年のアングロ・サクソン民族の人種差別や米国の霸道志向は、今次の惨劇の遠因の一部と考えられる。絶対的正義の化身を以て自任しイスラム教の聖域を踏み付けた³⁸⁴米国の醜い側面は、「五十歩百歩」の他者間の程度の差の半面の自身内部の時間差の部分の浮き彫りにした。

「大覇」(覇権大国)と「小覇」(地域覇権国家)の対立は、似た者同士の争いの匂いが漂う。米国は無法度に於いて「無頼」群の縮小版にも映るが、善・美の外観の裏の暗部は己れの「漬け物糞」³⁸⁵の産物として既視感が有る。「悪・憎悪の枢軸」³⁸⁶に因んで言えば、昨今の国際紛

争には「悪意の枢軸」が生む報復の連鎖が多い。9 .11 襲撃の時機の理由として、英国がアラブの反対を無視してパレスチナを制圧した1922年9月11日が有力視される³⁸⁷⁾が、時・空とも気宇壮大な怨恨の爆発は人類共通の情念の影の部分に通底した。

孔子が肯定した「以直報怨」(正直を以て怨みに報いる)の直情³⁸⁸⁾は報復を正当化し得るが、情理に適う故「以德報怨」(徳を以て怨みに報いる)の理想より普遍性を持つ。米英のイラク攻略は9 .11 襲撃への逆襲として、イスラム過激派の暴走の遠因と思える英国のパレスチナ制圧と重なるが、81年の経過は「九九帰一」(九九 ござ破算)に吻合する。2004年3月22日、4月17日、イスラエルがイスラム原理主義組織・ハマスの指導者を抹殺し国連の非難を受けたが、其の蛮行の恐さは報復が報復を呼ぶ永劫長恨の序幕と成った処だ。

ミサイル導弾攻撃に由る2回の暗殺は「流民の国」の情報・武器の威力を顕示したが、敵の頭を1発で消した物心両面の絶大な打撃は9 .11 事件と通じる。小利を獲って大義を失う点も一緒であるが、確実な利得に目を奪われるのも人情の常だ。鄧小平時代の実利志向は「時間は金銭なり、効率は生命なり」の金言に集約されるが、平和・繁栄と対極の戦争・破壊の領分に於いては、効率的時機の設定は金銭で換算できぬ効果を持つ。イスラム過激派やイスラエルの恐怖行動は観方に因れば、転換点で動き出す職業投資家の仕掛けに似ている。

首都陥落1周年の2004年4月8日の前後、イラクで抵抗勢力が外国人人質事件を同時多発的に起こした。戦後復興に派兵したスペインを恐喝する為の同国列車爆破が、其の前に9 .11 の恰度^{ちやうど}2年半後に当る3月11日に起きた。片方は計算尽くしの狙いであり片方は「巧合」(偶然の一致)の様だが、偶然の中に必然が有る事は北朝鮮の核恐喝の爆弾発言の時機でも証された。舞台の会談は3国が共同で設定した物で朝鮮人民軍創設記念日とは無関係のはずだが、建軍60年の節目に発した「將軍様」の雄叫びと共に世界に響いたのは天意だ。

朝鮮人民軍の成立は1948年2月4日の事で、建軍節の由来は1932年の金日成に由る抗日遊撃隊の創設だ。中国人民解放軍の建軍節(8月1日)も、1947年の改称より20年も昔の赤軍設立の日だ。両国の同根性を示す此の事象の反面、血盟の離散を暗示する時間の連環も有る。朝鮮労働党創設記念日と中華民国国慶節(10月10日)、中共国慶節と韓国建軍節(10月1日)は、朝鮮半島と台湾海峡の両側の交錯を見せ、北朝鮮建国記念日と毛沢東命日(9月9日)、金日成誕生日と胡耀邦命日(4月15日)は、中朝相剋の表徴に成る。

金日成の77歳誕生日に急逝した胡耀邦への追悼が民主化運動を誘発し、葬儀の直後に趙紫耀が平壤へ赴き政治風波の増幅を招いたのは、中国に対する北朝鮮の地政学的危険^{リスク}を思わせる。其の禍福の糾纏^{きゅうばん}は措て置き、東北亜細亜の様々な時間的節目の等高線が目につく。韓国の光復節と北朝鮮の解放記念日(8月15日)は、侵略・敗戦の日本に相対する同根性を窺わせる。「太陽節」(金日成誕生日)と「親愛なる首領金正日同志誕生日」の併存は、「太陽旗」(日の丸)の国の「緑の日」(先代天皇誕生日)、今上天皇誕生日と二重写しに成る。

祝祭日に見る特質の異同として、南北朝鮮の殖民地歴史や積怨との差を映す様に、中国では抗日戦争勝利記念日は祝日に入らず「光復節」も死語と成った。中・朝の国際労働節（5月1日）や国際婦人節（3月8日）は社会主義国家らしい³⁸⁹）が、朝・日の憲法記念日（其々12月27日、5月3日）や中・韓・朝の旧正月の残存は、意識形態や統治体制の違いを超えた共通だ³⁹⁰）。韓国の子供の日は日本と同じ5月5日で、中国の国・共政権の児童節（其々4月4日、6月1日）と風馬牛だが、端午節が起源と成る処に3国4方の文化縁が窺える。

韓国は朝鮮と共通の8月15日光復節の他に、旧暦8月15日の秋夕も祝祭日に入るが、日本で廃れた中秋の重みは中国を上回る。釈迦生誕日（旧暦4月8日）の祝日化も伝統重視の国柄を現わしているが、日本の小・中学校の新学年入学式が好く西暦の此の日に行われるのも、佛教の教祖を尊崇する古風の名残なのだ。韓国で^{クリスマス}基督生誕節も祝日と成るのは、^{キリスト}佛教と基督教の信者が其々宗教人口の半数を占める国情に相応しいが、日本以上の西洋化と東西折衷を印象付ける。興味深い事に、日・朝・韓・中・台の唯1つ共通の祝日は元旦だ。

日本や台湾では皇室や民国の年号を使うが、自前の年代を持つイスラム圏と同じく西暦を拒むまい。空間の境界線や言語の壁で分断された人類には、基督教の色の稀薄化した太陽暦や紀元は少数の共通項なのかも知れぬ。世界標準時間は時差の間隔を内包しつつ地球秩序の基軸の一部を成すが、歴史の分野では日付変更線ならぬ年代や期間、日期の等高線が節目に成る。年代等高線の有効性の一例は、主要経済目標の達成時期で亜細亜の雁行型成長の足跡が捉え得る事だが、線ならぬ面の期間や微視的時点の日の等高線はより奥深い。

天安門事件は世紀の座標で激動の'89年に当り、日付が71年前の「満州某重大事件」³⁹¹）と一緒だ。革命と暴力の時代に符合した暗合であるが、歴史の等高線は好くベルリオーズが創案した「固定楽想」（固定観念³⁹²）の様に、標題音楽の画竜点睛の基本旋律の反復を見せる。毛沢東は開国大典で礼砲を28発鳴らすよう発案し、公式の説明で建党から建国までの年数を理由に挙げた³⁹³）。建党の年の彼の年齢や姓名画数に因んだ若い頃の変名・「28画生」³⁹⁴）も思い浮かぶが、多重の意味を込めた其の数も「固定楽思」の符号と言える。

長短様々な景気循環³⁹⁵）も経済の基礎的条件や欲望・気力の消長を映す意味で、人間の常情や世間の常態を繰り返して見せる1齣1齣の活劇だ。株式市場の「3ヵ月1小波、3年1大波」も変易の等高線を形成するが、年度や12支の4半期に当る周期は歴史に既視感が多い事の理由を示唆する。其は要するに古今、東西共通の人間の本質の不易と、人事の固定観念に似合う天命の律儀さである。81難を極めないと経典を貰えない『西遊記』の設定は、「窮則変」（窮まれば則ち変ず）の一点に尽きる多変数の万華鏡^{からくり}の絡線を窺わせる³⁹⁶）。

毛沢東時代後と新世紀初の「新長征」の起点に相応しく、鄧小平体制は世紀の第81年に本格的に発足し³⁹⁷）、胡錦涛体制の誕生は建党81周年の直後の事だ。今次党大会は鄧容の『革命軍』が点火した1903年の革命熱^{ブーム}の99年後に当るが、最大の2桁の数で「久久」と同音の99は

9の2乗の81以上に究極の^{イメージ}形象が強い。3×33と3×3×3×3の年数の交錯は、景気循環や株式市場の複数の長期波動の転換点の稀有な重畳³⁹⁸⁾と同じく、新紀元の到来を思わせた。胡・温が俱に此の年に還暦を迎えた事も、再出発の節目を印象付けた。

建党後の81年を振り返れば、「梯田」(段々畑)風の均斉な展開が見られる。28年の奮闘で政権を取った後に建国の父の支配が27年続き、次の26年では2代の指導部が「脱毛」を遂げた。25年後の2027年は建軍百周年に当たるが、国・共決裂に起因した中共の「軍先」志向は、丸1世紀も経ては大分稀薄化してしまおう。微減の「与时俱進」は振り子の加速とも衰微とも取れるが、更に24, 23……と1年ずつ縮めると、途中で2137, 2249, 2261, 2282, 2291, 2299, 2321年等の節目を経て、末に又2世紀後の'27年に辿り着く³⁹⁹⁾。

此の結果は3²の27の魔力や三角数列の奥妙、「革命・革令・革運」(辛酉1921年・甲子1924年・戊辰1928年)期内の1927年の特殊性を思わせる。陰陽道が激変期とする「3革」は中国流の「地縁政治緊張」(地政学的リスク)に因んで、中共の建党・建軍に格好な「時縁文化緊張」時点と言える。同じ年から逆に29, 30……と1年ずつ増やして遊べば、+51, 52年の処に新千年初の1001年、中共建国の千年前に当たる949年等の節目に遭遇する。歴史の等高線や既視感はこの様に、現在の出来事が過去と将来の両方に刻み込んだ物である。

中共の建党、建国が孔子の没、生の其々2400, 2500年後に当たる事は、中国のイエスと言って能い彼の地位を思えば新紀元的意味を持つ。百年の連環は「一千零一夜」(千夜一夜)の如く尽きぬが、孔子と孟子の享年の73, 84が中国で厄年と成り、毛沢東も頻りに其の鬼門に気を揉んでいたのも、中国に於ける儒教の国教的性格を示す。日本では「本命年」(12年毎の生まれ年)が全て厄年を成す中国の習慣は無いが、巡り巡って2000年に導入した国会議員定年制の上限が73歳で、2人の元首相が84, 85歳で終身待遇を打ち切られた⁴⁰⁰⁾。

東北亜細亜に於ける儒教文化・^{ことだま}「言霊」意識の共通はこの偶然の符合に現れたが、減数列で84, 73に次ぐ62は正に2004年の中・朝・日首脳の高齢だ。死期近しと言う毛の嘆き⁴⁰¹⁾を聞いた1975年4月18日の金日成も63歳に成ったばかりだが、毛は嫌な予感的中し翌年に数え歳84で死去した。1994年7月8日に急逝した金の享年は奇しくも毛と同じ満82だが、毛の生誕百周年の数ヵ月後に当たる其の時は中共創設73周年の頃と重なる。直後の建国45周年を期にした鄧小平世代の権力移行の完遂で、党は「厄年」に乗り切った。

毛は北朝鮮建国28周年の日に他界したが、9月9日は彼にとって宿命の節目であった。1927年に初めて指揮した軍事闘争の湖南・江西の秋收蜂起で現地入りしたのも、1949年の北京占領後に郊外での仮住まいを終えて入城したのも、此の日の事とされる⁴⁰²⁾。3回の9.9の戦争勝利 他界は彼の生涯だけでなく、人間の道程や社会の変容の帰趨にも合う。天安門を飾る縦・横各9本の大きな門釘は、「表徴の帝国」の表玄関の原風景⁴⁰³⁾として、九重の苦を潜って九重の天に昇った龍の「窮尽」(窮め尽き。燃え尽き)の隠喩とも取れる。

其の9×9の意匠の発想である陽数の9の重畳は、5大節句の内の重陽(陰暦9月9日)の由来だ。此の菊の節句に丘に登り菊の酒を飲む古代中国の風習は、奈良時代より宮中で観菊の宴を催した日本流の優雅と違って厄払いを兼ねた。「人生易老天難老、歳歳重陽。今又重陽、戦地黄花分外香。」(人の生は古い易く天老い難し、歳歳に重陽のめぐりきて。今又も重陽、戦地の黄花の分外香るかな⁴⁰⁴)。内戦中に毛沢東が『採桑子・重陽』で詠んだ此の心境も、菊が国花を成す⁴⁰⁵日本の「紅旗征戎我が事に非ず」⁴⁰⁶とは対極的だ。

此の詞の恰度^{うた}20年後の建国は「戦地黄花」が満開した盛事と言えるが、後半の「一年一度秋風勁」(一年一度秋風勁し)に続いて、「不似春光。勝似春光」(春の光に似ざれども。春の光似り勝れるよ)は、「歳歳重陽。今又重陽」と同じ「蝉聯体」「蛛絲法」の修辞なのだ。「重陽」「春光」が下の句で一部再び出るのは、「蝉聯」の再任・連覇や「蛛絲」の僅かな痕跡・関連の意に即して、党首・国家元首を禅譲しつつ軍委主席を続投した江沢民の「半退」や、2000、'01年の年頭2度も新千年紀祝賀の演説をした熱演⁴⁰⁷を連想させる。

好事の再来に譬える「梅開二度」(梅の返り咲き)は、日本人好みの桜の「一期一会」と対照的に、民国時代の国花の強靱・貪欲を思わせる。日本の本歌取りに通じる「蝉聯・蛛絲」として、温総理は「路漫漫其脩遠兮、吾将上下而求索」(路は漫々として其脩く遠し、吾は将に上り下り求め索ねんとす)、「雄關漫道真如鉄、而今邁歩從頭越」(雄關道う漫れ真に鉄の如し、而今や邁歩して頭を越ゆ)を引いて、在任2年目の抱負を語った⁴⁰⁸。同じ楚の人・屈原と毛沢東の似た名句は、既視感を帯びて歴史の年輪に又織り込まれて行った。

漫々たる道路に臨む満々たる決意を古人から引き継いだ故人は、長征中に統帥に推された翌月の此の『婁山関』⁴⁰⁹でも、「歳歳重陽。今又重陽」風の「蝉聯」の変種を見せた。詞牌(詞の体裁⁴¹⁰)の「憶秦娥」の規則に沿って、後半冒頭の上記1聯が句点で閉じた後に、最後の3字の再掲で始まる次の句が続く。「從頭越、蒼山如海、残陽如血。」(頭を越ゆ、蒼き山海の如く、残陽血の如し。)難關攻落後の安堵と征伐再開前の緊張を詠む作品は、此の結びで凄愴・精彩の「酷」の異彩を放ち、其が温総理の本歌取りの隠し味と成った。

毛は末の8字を自作の白眉とした⁴¹¹が、其の絶唱は彼好みの孫悟空の誕生⁴¹²の様な断絶の産物ではない。前半の「西風烈、长空雁叫霜晨月。霜晨月、马蹄声碎，喇叭声咽。」(西風烈し、長けき空に雁の叫く霜ふりし晨の月。霜ふりし晨の月、馬蹄の声碎け、喇叭の声咽ぶ。)と共に、古の「簫声咽，秦娥夢断秦楼月。秦楼月，年年柳色，灞陵傷別。 / ……西風残照，漢家陵闕。」(簫の声咽び、秦娥夢を断つ秦楼の月。秦楼の月、年年の柳の色、灞陵別れを傷む。 / ……西風と残照、漢家の陵と闕⁴¹³)に、「固定樂思」の源が遡及できる。

「千古絶唱」の誉れが有る「西風残照」の一首は「憶秦娥」の元祖で、同じ李白作とされた「菩薩蛮」と共に「百代詞曲の祖」と呼ばれる⁴¹⁴。「詞」は「言+司」の字形が示唆する重み⁴¹⁵が有るだけに、此の長短不揃いの歌は律詩以上に心の窓と成り得る。其の祖型に「蝉聯体」が

敷かれた事は、中国的心性の奥義を現わす仕組みである。一旦区切った上で仕切り直す「梅開二度」の重層は、形式・内容俱に「不似春光。勝似春光」に集約される。「秦楼月。秦楼月」も「年年柳色」の変化に伴い、今宵の流行と万古の不易に跨る。

(未完)

日露戦争開戦百年2004年2月8日起稿

注

- 190) 「入関」の反対語の「出関」は、西・北の場合に使う「出塞」(塞外に出る)と通じて、首都・北京と東北の近くで遠い関係を思わせる(註133「遼遠」,註14「第3,4極」参照)。
- 191) 少華・遊胡『林彪這一生』,257頁。大軍「啓程」(出発)の1948年11月23日の事だが、本稿で深意不明とした紐育地下鉄世界貿易中心ビル駅の再開時機は、恰度55年後の同じ日である(註51参照)。直接の相関は無いものの、天数の連環は実に到る処に有る。
- 192) 「勝てば官軍,負ければ賊軍」に当る中国語は、「成則為王,敗則為寇」や「成則王侯,敗則寇」,「成則為王,敗則為虜」(『平妖伝』等が出典)だ。王侯は官軍に仕えられる身分なので、日本流に比べれば一段と野心的で勝敗の落差も激しい。
- 「勝てば官軍」は明治維新の時に生まれた言葉とされる(尾上兼英監修『成語林 故事ことわざ慣用語』,旺文社,1992年)が、2004年4月21日に逝った日本マクドナルドの創業者・藤田田が好く此で制覇の理念を表現しただけに、不詳の出典は興味を引く。
- 193) 「烏丸」とも言う烏桓は、秦末・漢初に東胡が匈奴に敗れて烏桓山に移った遊牧・狩猟民族だ。漢初に匈奴に帰属し、武帝以降は漢に従属し、上谷・漁陽・右北平・遼東・遼西等5塞外に引越した。曹操が1万人余りを中原に定住させ、又一部が東北に残ったが、後に他の民族と融合した。(『辞海』)弱小民族の悲哀を漂わせた歩みであるが、曹操の207年の出兵は此の民族の運命を大きく変えたと思える。
- 194) 「魏蜀呉赤壁之戦,曹操大軍南下,帯的是多少兵?」と言う林彪の質問に対して、劉は「号称百万,其实只有八十三万人馬」と答えたが、其の即座の反応は「不假思索,脱口而出」と書かれた(出处は註191に同じ)。
- 195) 解放軍総政治部主任・蕭華の作詞に由る『長征組歌』(1965年)には、「毛主席用兵真如神」と有る。周恩来も此の歌詞を以て、毛が「四渡赤水」(赤水を4度渡る)戦闘で見せた非凡な軍事指揮の芸術を讃えた。
- 196) 中国語の「爛熟」は此の用例の通り熟知の意も持つが、「東坡肉」の「漸老漸淡」(註44参照)と合わせ考えれば興味深い。最近の日本では中国の酢が静かな人気を集めているが、代表格の鎮江老酢を「熟爛鎮江酢」とした訳語(『読売新聞』2004年2月13日広告)には滋味が滲み出る。
- 197) 其の「防止資本主義復辟」の「復辟」は、『広辞苑』の語釈の通り、「〔書経・咸有一徳〕(“辟”は天子・諸侯の意) 退位した君主が再び位につくこと。政を君主に返し、重臣が摂政を辞すること」だ。退位した宣統帝・溥儀を張勳が担ぎ出した「復辟」劇(1917年。12日間で失敗)が現代の典型だが、資本主義は近代の社会体制であり封建時代の君主ではないので、「復辟」云々には違和感を覚える。尤も、安徽軍閥・張勳の逆戻りの愚行とだぶらせる点では、中共の巧みな観念操作とも言えよう。猶、「辟」の王侯の意は開辟・創生の形象を考えれば頷くが、張勳の冒險は文字通りの「成則王侯,敗則為寇」(註192参照)の投機に思えて来る。

198) 毛沢東は1946年8月6日に米国記者・ストロングとの会見で、全ての反動派を「紙老虎」を形容し米国の原子爆弾も然りと断じた。1973年2月17日にキッシンジャーとの会見で、通訳・唐聞生が「主席は英語の単語を1つ発案されました」と口を挟むと、彼は「そう、paper tiger という表現を造りました」と答え、相手は「“張り子の虎”か。其は我が国の事ですね」と笑った(W. パー編、鈴木主税・浅岡政子訳『キッシンジャー“最高機密”会話録』、毎日新聞社、1999年[原典同]、130頁)。

広島原爆投下1周年の時に発した此の論断は、毛一流の強情・豪語と思われがちだが、核兵器が不発の宝刀の儘であり続ける現実に証明された。目下の北朝鮮の核恐喝に対しても、中国は同様の思いで腹を括っている事か。

199) 佛教語でもある「水中月、鏡中花」は幻の虚像が第一義で、非現実的の夢や綺麗事の欺瞞の他に、『紅樓夢』第5回の「一個是水月中、一個是鏡中花」の様に、成就できぬ恋情を表わす場合も有る。「虚幻現実」は『紅樓夢』の「太虚幻境」(第5回)と、南米現代文学の「魔幻現実主義」(魔術的現実主義)を合成した筆者の用語だ。

200) 日本共産党中央委員会議長・不破哲三は、『資本論』読解の著書を数多く出して来た(『資本論』全3部を読む 代々木「資本論」ゼミナール講義集』[全7冊、新日本出版、2003~04年]巻末簡略参照)が、マルクスの此の主著を読み解く精力的な研鑽と系統的な成果は、少なくとも毛沢東時代以来の中共指導者には見当らない。毛沢東も1954年に『資本論』第1巻(人民出版社1953年初版)に、「原著出版から71年後に出た中国語版を87年後に読む」と書き込んだ程だ(逢先知著、竹内実・浅野純一訳『毛沢東の読書生活』、サイマル出版会、1995年[原典=1986年]、46頁)。尤も、日共設立80周年に際して党本部で開催された上記のゼミナールも、関係者集団に由る通読として党史上の初の壮挙だと言うので、『資本論』の難解はやはり半端ではない。

201) 『日本経済新聞』2003年12月12日報道「温家宝首相 訪米を終える “等身大の中国” ソフトに訴え」では、其の「温流外交」の鍵言葉として「柔・バランス・等身大」を挙げた。仕えた胡耀邦・趙紫陽両総書記の失脚に関わらず権力抗争に呑み込まれず現在の地位を築き挙げた氏の、修羅場を潜り抜けて来た抜群の平衡感覚が対米外交でも求められている、と言う指摘は的を得たが、其の外柔内剛の極致は成らず者の胯の下を潜り抜けた韓信の「大忍」に他ならぬ。其にしても「温流外交」の名は、時下の中国の「韓流」(韓国熱)が引っ掛けた「寒流」を思い起せば興味津々だ。

202) G. マルクスの『百年の孤独』(1967年)が「文革」後文学の「尋根(根を尋ねる)」派を魅了したのは、「百年孤独」が中国の好みに合う事も一因と思える。漢詩の名句にも其の類いは一杯思い浮かべられ、杜甫の「万里悲秋常作客、百年多病独登台」が一例である。国民党時代に中国が抱いていた「東亜病夫」の鬱憤や、評論家・黄子平等が魯迅の『紅樓夢』評を借りて20世紀中国文学の雰囲気を概括した「悲涼」も、此の情景・情緒に当て嵌まる。「独登台」の字面は謀らずも李登輝の台湾独立の悲願、及び台湾の国際的孤立に暗合する。

203) 『朝日新聞』1979年2月3日夕刊記事「鄧さん 南部にはしゃぐ 宇宙へ“飛び”、ロデオに興じる」は、「操縦席に座った鄧氏は、失礼ながら初めておサルの電車に乗った子供のように不安な表情であった」と記した。

204) 鄧小平はヒューストン郊外でパーベキュー・パーティーに興じ、テキサス名物のロデオに身を乗り出して見入り、赤や黒のカーボーイ帽子のロデオたちが裸馬を乗り熟し、投げ縄で小牛を捕える様子に拍手し、自らカーボーイ帽子を被った。

観方に因れば、其の姿は鄧の挑戦精神や不羈な性格に似合う。cowboyの中国語訳・「牛仔」は小牛の意で、広東方言でチンピラを表わす。本稿で言及した馬駒と「成らず者」に繋がる両義だが、諺の「初生牛犢怕不虎」(生まれたばかりの小牛は虎を恐れない)は、「反覇」(反覇権主義)の中国にも「小覇」(地域覇権主義)の「無頼国家」にも当て嵌まる。

猶、「胡服騎射」(註252参照)に関連するが、jeansの中国語訳は「牛仔褲」と言う。

- 205) 温家宝の主導で東北振興の戦略が打ち出された事は内外の指摘の通り、新首相が就任の1年目に前任者の路線を大きく変えぬ慣例を考えれば大胆な挙動だ。但し、所謂「新官上任三把火」(新任の官吏は松明3本に火を点ける[最初の内は張り切って派手な行動に出る])も、腕を見せる為の中国流統治術の伝統なのだ。江沢民体制の西部開発の優先順位は下がったが、重工業と経済効率への重視は毛・鄧路線への合理的回帰と言える。
- 206) 毛・鄧との間に江沢民の時代があった事も、「隔世之観」の一義である。最初に上等な背広を着させた指導者は、胡耀邦・趙紫陽ではなく江沢民なのだ。
- 207) 小泉首相は2003年の訪米で小ブッシュ所有の牧場に泊まる款待を受けたが、皇居より数倍も広い牧場を持つ米大統領は西部劇を好む彼と天然的に気が合おう。小泉の『真昼の決闘』に対する偏愛は其の政治的手法の「賭博師」的側面に符合するが、米国の西部劇が中国で余り人気が無い事は研究に値する。
- 208) 鄧小平のカウボーイ姿を人心収攬の為の形象作戦と見る向きが内外俱に有ったが、「文革」時代からの「脱毛」(脱皮・脱毛沢東。註217参照)を映して、彼を「媚外」(外国に媚びる)と誇る声はもはや無い。「一本万利」(1の資本で1万倍の利を得る)以上の「無本万利」(元手無しで1万倍の利を得る)の演出として、寧ろ人々の感心を得た事は、改革・開放に因って喚起された中国人の現実主義者の本性を窺わせる。其の一齣が好く語り継がれたのは、中国の指導者が滅多に羽目を外すまい事の裏返しだ。周恩来がビルマで「澆水節」(水を掛け合う祭り)に参加した光景も、彼の事績や中国外交の逸話で特筆されているが、革命の為なら如何なる役も演じねば成らぬと言う周の実用主義の好演だ。
- 209) 日本IBM主催の第21回「比叢会議」(2003年)で、筆者に先立って講演した作家・評論家の深田祐介は、「胡錦濤の正体」の題で得意な中共批判を展開し、セールスマン然の胡のスマートな外観に騙されては行けないと述べた。筆者は氏の中国観には見解の相異が多いが、印象と内実の乖離が有り得る事や服飾の重要性に関しては一般論として頷ける。
- 210) 「重点転移」は「工作重点転移」(仕事の重点の移転[政治闘争 経済建設])と言う、1978年末の党中央総会で可決した改革・開放路線の鍵言葉に因んだ表現。
- 211) 内外で注目を浴びた此の人脈に筆者が付けた「共青团学校」の名は、指導者を輩出した日本自民党の「吉田(中曽根)学校」、指導者を養成する中共中央党校(党中央学校)、林彪が唱えた「毛沢東思想大学校」等と多重映しにする物だ。日本流の人脈「学校」に於ける「親分・子分」や「先輩・同期・後輩」の構図は、中国の「家長制」の名残や「輩分」(世代の序)の規矩と通じる。
- 212) 南山・南哲編『周恩来生平』上、吉林人民出版社、1997年、665頁。「三羊(陽)開泰」を以て毛に楊勇の起用を発案した周は、縁起を担ぐよりも機会を「3楊」に均等に与えるのが主旨だろう(楊は志願軍第20兵团司令として朝鮮戦争の終盤で勝利を収め、生涯最も輝かしい一頁を遺す結果と成った)が、中国政治に於ける語呂合わせや「言靈」意識の多出を示す逸話だ。

「三陽開泰」は新年の頌詞であり、『易経』の「泰卦」で三陽が下に在って正月に当る事が由

来だ。正月を指す「三陽」の用法も、其の卦の3つの陽の爻の寓意が語源と思える。「開泰」は好運に巡り合う、開運する意で、「開台」(開幕。舞台[芝居]が始まる)と同音である。年初の祝福の言葉に用いた「三陽開泰」の語源は不明だが、明末万暦時代の張居正の『賀元旦表』には出ている。共産党政権の初代総理・周恩来総理の借用は其の古例と合わせて、中国に於ける政治・祭祀一体の伝統を物語っている。因みに、政権の中核で変革を敢行し死後名声が毀損された張の他界は、鄧小平・胡耀邦体制の本格的発足の恰度4百年前に当る1582年の事だ。

「三陽」「開泰」「開台」は俱に日本語に入っていないので、此の4字熟語も語呂合わせも中国独特の物と言える。因みに、日本で忌避されがちな羊の年は、中国では縁起が好いとする向きが有る。左賚春は『中国宇航員飛行記録』(人民出版社, 2003年)の中で、有人宇宙飛行成功の2003年の時機の好さを斯く強調した。『説文解字』曰く、羊は目出度い物。依って中国の古い器に刻まれた銘文には「吉羊」が多かった。(日本語版[劉雨華・許春蓮訳『中国航天員飛行記録 宇宙飛行士飛行ルボ』, オーム社, 2004年], 289~290頁)。「陽」との同音や「三陽開泰」の発想も一因と考えられようが、「羊年」は後述の様に凶の一面も持っている。

猶、左賚春の「吉羊」談義は続いて、「羊の性格は大人しく優しい。何時も群れに成って進み、……困難を乗り越え最後まで足取りを緩めない」と言うが、「帯(領)羊」(引率羊)と合わせ考えれば興味深い(註279参照)。

- 213) 「共青团学校」(註211参照)から鄧小平・胡錦濤時代の党首が生まれた事は、鄧と胡の時代の隔世遺伝の関係を思わせる(拙論「共産党中国の4世代指導者の“順時計演変(時計廻りの移行)”」(1) 理・礼・力・利を軸とする中国政治 - 統治文化新論)[本誌16巻1号, 2003年]参照)が、思想教育を重視する毛沢東体制の遺伝因子が元であろう。蔣経国の三民主義青年団や党・軍の政治工作の担当経験を思えば、国・共の同根性が改めて感じ取れる。鄧の在位中の胡耀邦・胡啓立(政治局常務委員)の失脚は彼の実務志向とも合致するが、政治から経済への「重点移転」の定着に因り、次世代以降の党首は恐らく「共青团学校」から出るまい。

党中央政治局常務委員会に於ける「共青团学校」の胡氏の常住は、胡錦濤が次期再任すれば1980年以降31年も続く事に成る。中共の党・国の歴史の奇観としか言い様が無いが、「3胡」(耀邦・啓立・克実)と胡錦濤の其々の浮沈は興味深い。時勢と英雄の相互創出の関係とも符合するが、毛・鄧の様な豪傑の時代が去った後の首領には、実力と同じ比重が其以上に運氣が必須条件に成ろう。件の数人の胡氏の「花相似、人不同」や、冷戦終了後の多くの国・地域の指導者の資質・実績を観ても、「運も実力の内」の原理は確認出来よう。

- 214) 発射実験の時期は明らかに成らなかったが、『解放軍報』の報道を新華社が打電した公表方式は、党主席・華国鋒に対する老将帥等の不服と結び付いて考えると、軍政治部機関紙か党中央機関紙・『人民日報』を凌ぐ自己顕示にも思える。

- 215) 「両弾」は日本でよく原子爆弾・水素爆弾と誤報されるが、此の2者から成る「核弾」(核爆弾)と「戦略導弾」(戦略ミサイル)を指すのだ。「両弾」は更に「一星」(人工衛星)が後に付くが、翼たる導弾・衛星が日本で片手落ちに成りがちなのは、実感の欠如に因る想像の翼の不足の所為か。

- 216) 米国の産軍複合体を擬った筆者の造語。毛沢東は1966年5月7日に国防相・林彪宛ての書簡で、軍は「軍工・軍農」(軍隊+工業・農業)の結合で生産に従事せよと号令を掛けた。鄧小平は軍需産業を民用へ転化させる一方、軍隊が経営に乗り出す事を容認した。

- 217) 胡耀邦総書記は演説で「脱毛」(脱皮)を以て、変革期の換骨奪胎を比喻した事が有るが、「脱毛

沢東」の含みを隠し持ったとしても不思議ではない。

218) 華は前年の中央総会で党副主席に降格され軍委主席も解かれたが、1年後の党大会で政治局にも止まらず平の中央委員になったのは、直近まで5年続いた栄光に比べて悲惨な陥落と言わざるを得ない。

219) 1997年9月の党大会で中央委員の定年制が導入されたが、華国鋒は上限より6歳も高齢の76歳なのに中央委員会に留任した。唯一の例外を認めた超法規的処置は「ゴム判」の可塑性や、「一個国家、兩種制度」ならぬ「一個制度、兩種運用」の柔軟性を思わせた。

曾て毛沢東は党幹部に死後火葬に付すよう呼び掛けたが、許世友將軍は敢えて同意書での署名を拒み、「活着尽忠，死後尽孝」（存命中は忠を尽くし，死後は孝を尽くす）の主張を直訴した。1985年没後は結局、「下不為例」（前例とせぬ）を前提にする鄧小平の許可で，本人の希望通り土葬で母親の墓に入った。（李文卿『近看許世友 1967 - 1985』，解放軍文芸出版社，2002年，274～276頁）

中村幸治は『中国 権力核心』（文藝春秋，2000年）の中で，党大会前の6月末時点での満年齢を基準に70歳以上の者は中央委員に成れないとの内規を造り，喬石を卸し自分をギリギリ遣した江沢民の権謀を描いた上，次の様に付け加えた。「但し，これは党の正式な決定ではない。中央委員の中には，21年生まれの華国鋒がいるからだ。華国鋒については，引退するに当って何らかの決定が行われ，中央委員のポストを終身とすることが確認されたと言われている。」（322～323頁）華の残留が容認されたのは，「4人組」逮捕の功績を考慮した温情と共に，勢力を失い影響が無いという冷静な判断も有ったろう。筋を通すか情に流れるかという二者択一の問いは，内規の非絶対性によって難無く解決されたわけだ。

220) 楊炳章は『鄧小平 政治的伝記』の中で，胡耀邦を総書記に抜擢し一旦華国鋒の代りの党主席に就任させた後，恐れ多い主席の肩書きを胡に許し自ら副主席に甘んじたくない，という鄧の心理を読み解いた。実情に対する直観的分析は確証の引用よりも実りが多い場合がある，と言った著者の弁明（250頁）も含めて，本稿筆者は頷けるばかりである。

虚名と実利，荣誉と健康が同時に保て難い「兩難」（ジレンマ）も，党主席職務廃止の妙策で鄧にとって「兩全其美」（兩方円満）の答えが出た。必要に応じて既存の枠組みの外で都合の好い別枠を造るのは，自分の誕生日の手前を定年の上限に定めた江沢民の例（註219参照）の様に，中国の政治では常套手段と成っている。同じ東洋の社会主義国家の北朝鮮でも，金正日が1998年に4年前に就任した国防委員会委員長を最高位と定めたのは，父君の職名を踏まぬ孝行の宣揚に成り，国家元首の儀礼的活動に因る消耗を避ける一挙兩得だ。

221) 厳密に言えば，ソ共の書記長は1922年に新設された頃，「事務方の責任者」程度の認識しか無く，初代に就任したスターリンが盗聴等で党幹部の機密を握り，次第に強権が其処に集中するに至ったのだ（産経新聞・斎藤勉『スターリン秘録』，産経新聞社，2001年，260～261頁）。レーニンの党内職名が中・日・欧米の辞書や百科全書で余り出ないのは，其の下剋上の逆転の結果と思える。

中共党首の名称はソ共を先取りした観も有るが，「総書記」を尊ぶのは司馬遼太郎が中国の本質を概括した「文章の国」らしい。因みに，中共の党規則は「党章」と言う。日本流の「幹事長」は其に比べて職人的語感が強く（「幹事」は事を遣る意），肉体労働を軽視する中国の伝統からすれば格好が悪い。幹事長を経て総理と成った森喜朗は座を盛り上げる芸が巧く，政治的能力は余り無いと酷評されたが，party（党）を切り盛りする事は意外と宴会幹事の役に通じる。

- 鄧小平は党中央秘書長を経て総書記に就任したが、東北亜細亜共産圏(中・朝・ソ)の同根性を示す様に、金正日が1997年に就いた職名も「総書記」と「総秘書」の両方の訳が有り(萩原遼訳『黄長燁回顧録 金正日への宣戦布告』、文藝春秋、1999年)、其の権力維持の秘密の一端がスターリン流の幹部の秘密の掌握に在る。
- 222) 最初の3代総書記の陳独秀(1921~27年)、向忠發('28~31年)、張聞天('34~35年)、其々陳の失脚と向の転向の後に事実上の総書記と成った瞿秋白と李立三、王明、建国後と「文革」後に総書記を務めた鄧小平と胡耀邦、趙紫陽は、例外無く失脚した。
- 223) 毛は1935年初の遵義会議で政治局常務委員と軍事指揮小組統轄に選出され、翌年末に党中央革命軍事委員会主席に就任し、'43、44年に中央政治局主席兼中央書記処主席、中央委員会党主席に選出された。興味深い事に、一連の「主席」は恰も彼専用の様に、其の都度新設された椅子なのである。
- 224) 笠井孝之『毛沢東と林彪 文革の謎 林彪事件に迫る』(日中出版、2002年)に、突出に対する林彪の極度な忌避ぶりが多く記された(46~52頁)。江沢民の総書記拜命の当初の不安は海外で色々報道されており、筆者は関連論考で引いた事が有るので此処で省く。
- 225) 『広辞苑』には「前車の覆るは後車の戒め」の項が有り、出典は『漢書・賈誼伝』と成るが、『辞海』の「前車」では『荀子・成相』の「前車已覆、後未知更何覚時」が語源で、「前車之鑑」の項の例示は『鏡花縁』の「若更執迷不醒、這四人就是前車之鑑」た。
- 226) 中国語の「反正」は副詞として、「何方道。どうせ」を表わす。
- 227) 毛沢東の「大権独攬、小権分散」に因んだ表現。鄧小平時代の進歩とも言うべきであろう。
- 228) 中共建党記念日の根拠である第1回党大会の開催日は、鄧小平時代に7月23日だったと判明したが、今も「党慶」は従来通り7月1日と成っている。
- 229) 鄧は1980年3月~翌年6月、何度も起草グループに修正意見を出した。其の「対起草『建国以来党的若干歴史問題的決議』的意見」(『鄧小平文選』第2巻、291~310頁)から、彼の価値観や平衡感覚と共に、文書を以て評価を定める中国の伝統が見て取れる。
- 230) 後に党規則と憲法に盛り込まれた「三個代表」とは、「中国共産党は中国の先進的生産力の発展の要請を代表し、中国の先進的文化的前進する方向を代表し、中国の最も広範な人民の根本的利益を代表する」。
- 231) 「総凄惨・総清算」は「総生産・総精彩」を擬った筆者の造語。中国語の「凄惨」、「清算」と「生産」は発音が別々だが、日本語の語呂合わせは毛沢東時代の凄惨な清算(中国語の「清算」は肅清の意も有る)、其に対する鄧小平時代の清算を言い得て妙だ。
- 232) 最近の中国で流行った新語の「知本主義」は、「資本主義」との音通から生まれた和製概念の輸入かも知れぬ。中国語の「知」(zhi)と「資」(zi)は読み方が違うが、勉学の功利効果を鼓吹する『神童』詩の「書中自有黄金屋」が端的に示した様に、知識を資本と見做す観念は昔から根強い(拙論「儒商・徳治」の道:理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化(1)参照)。
- 233) 「国民総生産」と「共産党」、「国民党」を混ぜた本稿筆者の造語。
- 234) 後毛沢東時代の終焉を感じさせた転換点は1994年9月、鄧小平等第2世代指導部からの権力譲渡は完了したと言う江沢民政権の宣言だ。毛の執政27年の3分の2に当たる18年に続く計算に成るが、毛沢東生誕百年の直後だった事も天の時の妙に思える。
- 235) 「離経背道」とも言う「離経叛道」の出典は『元曲外・貶黄州』とされるが、「経」は儒教の經典と解するのが普通なので、異民族支配下の漢族文化の強い生命力が窺われる。

236) 『鄧小平文選』に出た最初の「先富」論は、1983年1月12日に経済部門責任者との談話(「各項工作都要有助於建設有中国特色的社会主义」, 第3巻, 22~23頁)だ。注目すべき事実として、前年の工農業総生産が久しぶり8%増と成った事が動因の1つだ。

237) 孫文夫人・宋慶齡(1949~54, 59~75年)や蒙古族の党中央政治局員・烏蘭夫(1983~88年)の例と共に、国家副主席の儀礼的閑職の性質を思わせるが、象徴性が濃いだけに采配の妙も感じられる。

因みに、歴代の国家主席+副主席の組み合わせを観ると、人事の均衡と共に時代の変遷が見受けられる。開国時の毛沢東+朱徳・劉少奇・宋慶齡・李済深・張瀾・高崗に対して、1954年からの毛沢東+朱徳は、高崗肅清後の政治独裁化の匂いがした。1959年~「文革」の劉少奇+宋慶齡・董必武は、再び所謂「党外民主人士」に一席を譲った。1983年に此の職位が復活した後の李先念+烏蘭夫は、非共産党勢力より少数民族を配慮した人選である。1988年からの楊尚昆+王震も一党独裁を体現するコンビで、2人とも軍人出身である事は天安門事件の際の鎮圧擁護の態度と共に、開発独裁の体制の端的な表徴の様に映るが、同じ中共軍統帥の毛+朱コンビの時代に発足した1956年体制を彷彿とさせた点では、健全化に向けた新たな一歩とも思える。1993年に江沢民+栄毅仁と成ったのは、移行経済の本格的実現の証と取れよう。1998年の江沢民+胡錦涛、更に2003年の胡錦涛+曾慶紅は、党・国の一体化と後継者の透明度の向上を見せた。「文革」中に幻と成った毛沢東+林彪の案を思い起すと、俱に中共軍統帥で現任+後継のコンビである共通項で、共産党中国の時計廻りの変移を改めて感じる。

238) 「紅色資本家」は劉少奇が建国初期に義兄・王光英等との懇談の際の言葉とされ、其を借用した鄧の「赤い資本家」肯定論も同じ諧謔調を装った真面目な主張だ。

239) 「紅色買弁」を以て自任したと言う批判も有ったが、劉少奇は捏造として抗議した。

240) 「党内走資本主義道路的当権派」の言い回しは、毛沢東が1964年12月12日に内部文書で提起したのだ。羅点点は『紅色家族档案』で此の時機に言及した(47頁)が、彼女の父親・羅瑞卿が1年後の同じ頃に電撃逮捕された事と合わせて、新「双12事变」(1936年12月12日の西安事变の俗称)と名付けたくなる。

劉少奇を「党内最大走資派」と断罪した第1弾は、1967年4月1日『人民日報』に載った戚本禹(党中央文革指導小組成員)の論文だ。2年後の党大会も選りに選って此の日に開幕したのは、欧米の「愚人節」(4月馬鹿)の忌憚を持たぬ国情の所産だ。曾て文芸評論家・胡風は毛の命令で投獄された後、「大躍進」の報道を狂気の沙汰と思い、配布された『人民日報』を偽物と疑ったが、「文革」の欺瞞は謀らずも此の2回の日付けに象徴された。

241) 建国の翌年に栄毅仁は毛沢東と初対面の際、184釐も有る長身を深く屈めて恭順を尽くした。彼は民族資本家の少壯派ですと周恩来が幽默に紹介したのに、此の様な場で何時も冗談を飛ばす毛は神妙な表情で、只「你来了, 很好!」(ようこそ, いらっしゃいました)と応えただけで、一座を訝らせた。毛は競争相手に対してのみ慎重に成る性格だと言われるが、まさか栄を競争相手と考えた事は無かろう(以上は程波著『中共“八大”決策内幕』[中国档案出版社, 1999年]の記述[126~127頁])が、本稿筆者は大資本家という人種への不慣れと取りたい。後に晩年の毛は「怕生」(人見知りする)に成ったが、上記の反応は「生人」(見知らぬ人)への「怕」(恐怖)の形而上的変種とも思える。

242) 劉少奇夫人・王光美は1921年に北京で生まれたが、父親は天津の民族資本家で北洋軍閥政府の工商司長を務めた事が有る。兄・王光英も1943年の天津近代化学廠長(工場長)就任を始め、天津

の有数の実業家として活躍し建国後に至った。

一方、鄧小平夫人・卓琳（本名・浦琮英）の父親は異名・「宣腿大王」の通り、雲南宣威火腿（浙江金華火腿と並ぶ中国の火腿の名物）の経営者であった。鄧は失脚中の1972年に地方を回った際、招宴に出た美味しい料理は君の家の物には及ばないと夫人に言った。実家は資本家ですと夫人が一座に披露すると、大資本家じゃなく中資本家なのだと彼は付け加えた（董懷平・李成関編『鄧小平八次南巡紀実』、解放軍文芸出版社、2002年、23頁）。「悪い出身」を悪惧れぬ夫妻の鷹揚さや、鄧の「大」の基準を窺わせる逸話として印象的だ。

劉・鄧の資本主義志向は或る意味で、姻縁に因る資本家への慣れとも関係が有ろう。日本軍用コンドームの避妊具を造った等の誇りを「文革」中散々受けた王光英は、1983年に國務院直屬の総合商社・光大集團の総帥に任命されたが、「黒猫」に抵抗の無い鄧の志向を映す人事だ。

- 243) 「文革」派は鄧小平の再起後の「旧社会・資本主義の復活」を攻撃したが、1980年代の深圳經濟特区を訪れた古參幹部の「辛辛苦苦二十年，一夜回到解放前」（20年の苦勞も水の泡，一夜で解放前に戻った）も、似た気持ちの嘆きである。20年前の其の悲鳴は今や笑い話に聞こえるが、既視感の文脈で吟味すれば興味津々だ。
- 244) 王光英も兼任した同じ2職は俱に中国独特の名称で、中国的発想を窺わせる。「董事」（取締役）、「董事長」（代表取締役）、「董事会」（取締役会）は、「董事」と「懂事」（物事が解る）の同音・形似や、「股東」（株主）と同音の「古董」（骨董）を連想すれば、判断力と「資歴」（キャリア）の重要性を思わせる。「經理」（社長）、「總經理」（總裁）は經營・理財の原義と共に、字面には「董事」と通じて經驗・理性の重みが出ている。
- 245) 其々南方と北方、虚業と実業の2人の「赤い財閥」は、榮毅仁は王光英より早く重用され（註242参照）、而も後に「榮任」（榮転）の字面通り国家副主席に昇進した。金融を經濟の中核とした鄧小平らしい采配は、江南の胡錦濤と天津の温家宝の高低と物合する。
- 246) 真っ黒な「暗黒」と微妙に違って、不透明や閉塞の意味合いがより濃い「暗闇」は、「一寸先は闇」（日本の諺）と「万馬齊暗究可哀」（毛沢東が好く引いた清の隨筆家・龔自珍の詩）を念頭に置いた表現だ。
- 247) 『鄧小平文選』第3巻、60頁。
- 248) 拙論「生活風景の中の“文化溝”——衣・食・住・行における日中文化の比較」（立命館人文科学研究所編『立命館土曜講座シリーズ14 日中国交回復30周年 日中の過去・現在・未来』[2002年]所収）参照。
- 249) 山崎豊子は「胡耀邦さんにもう一度会いたい」（『文藝春秋』1989年7月号）の中で、北京で觀た胡耀邦追悼会のテレビ中継の印象を記した。「何よりも私の眼を射たのは、遺体が人民服ではなく、スーツ姿であったことだ。ノ恐らく、中華人民共和國の指導者で、スーツ姿の遺体は、最初であると思う。いかにも改革派の指導者らしい服装であった。ネクタイが歪み、ちょっと歪んでいるのが気になったが、いつも身なりをかまわない胡耀邦氏らしい姿であった。」如何にも西側の女性作家らしい觀察だが、最後の一文は胡のスーツに似合わぬ姿を暗に表現し、不似合いを顧みず着用した勇氣を讃えている様に思う。
- 250) グローバル化を表わす中国語の「全球化」は、日本でも原文の儘で用いる例が散見された（例えば『朝日新聞』2000年元旦社説の題）が、globalizationを漢語で訳す気配は日本では未だ無い。
- 251) 「時尚」（時の流行・風習）を映す「時髦」（モダン）な装いの意として、「時裝」の字面は明快で妙味が有る。因みに、日本人が好む料理素材の「旬」は中国語で「時鮮」と言うが、日本流の

「旬の人」は間も無く腐る含みを持つので訳し難いし使い難い。

252) 此の史実は日本に於ける馴染み度が低い(『広辞苑』の「胡服」の語釈は、「中国北方の民族の胡人の着る服」のみ)が、中国では先人の智慧として好く知られている。『辞海』には成語の「胡服騎射」の項も有り、次の様に説明している。「戦国時趙武靈王採取西北遊牧和半遊牧人民的服飾，學習騎射，史稱胡服騎射。其服上褶下袴，有貂，蟬為飾的武冠，金鈎為飾的具帶，足上穿靴，便於騎射。」

文中の「遊牧民・半遊牧民」の区分は、烏桓(註193参照)や清朝誕生前後の満族の性質を規定する場合にも役立つし、農耕民族と騎馬民族的蛮勇・愚直(註257参照)を形容するのに役立つ。「胡服騎射」の解は西北の民謡・『信天遊』の遊牧民族的色彩を改めて思わせ、貂・蟬を飾りと為した件から『三国志演義』の貂蟬の隠し味が思い当たる。

253) 「実存主義」と「構造主義」の名を合成した節も有る(中国語では其々「存在主義」と「結構主義」)。

254) 日本語の「重量じゅうりょう」と「軽重けいちゅう」の「重」は発音が違い、「重複」も「じゅうふく・ちようふく」の2通りが有るが、中国語の「重」は「重量チュンリアン」や「軽重チンチュワン」の場合はzhong, 「重演チュワンイェン」, 「重疊チュワンディエ」, 「重複チュワンフー」, 「多重ドゥオチュワン」の場合はchongと読む。中国語は原則的に1字が1種類の読み方しか無いだけに興味深いが、重層と重量の相関や積み重ねの重みを思わせる。

255) 「転型期」も「転形期」も和製漢語と思われ、恐らく台湾経由で此の頃は中国語にも入った。筆者は中国語でも同音の2語を使い分け、本質的变化を強調する場合は「転型」、表面的変容の要素が強い場合は「転形」を用いる。

256) 胡耀邦は毛沢東・劉少奇・彭德懷等と同じく、湖南人の「騾子」(驢馬)めく強情・天邪あまのじゃく鬼気質を見せたが、彼より賢く瀟洒な趙紫陽の失脚前後の不退転は、中原(河南)の半遊牧民的風土の遺伝子(註252, 193参照)を思わせる。

257) 政治委員を務めた新4軍(抗日戦争中の中共南方軍)時代の劉少奇の暗号名は由来不明だが、筆者が軽装行軍の寓意を読み取った根拠は「胡服」の原義と共に、軍長・陳毅作詞の『新4軍軍歌』(1939年)の「縦横馳聘」「千万里転戦」等有る(註252参照)。

258) 「改革の総設計師」は江沢民時代の鄧小平礼讃の成句だが、田中角栄が自慢した資格の「1級建築士」と対照すれば興味深い。中国語の「設計」は計謀を編む意も有るので、「総設計師」は大戦略家の語感が強い。「師」は毛沢東礼讃の「偉大的導師」(偉大な教官[尊師])と重なるが、日本流の「士」に比べて「文章の国」(註221参照)の伝統が漂う。

259) 拙論「時間観念を巡る日中の「文化溝カルチャー・ギャップ」の実態とデジタル時代に於ける伝統回帰の展望(上)」(本誌16巻2号, 2003年)参照。

260) 1984年10月10日に独逸首相との会見でも力説し、其の談話は『鄧小平文選』第3巻に収録された(81~82頁)際、「我們把改革当作一種革命」との題が付けられた。

261) 半世紀以上に中国で定着して来た中共の史観では、洋務運動は「列強の買弁」云々の色彩の故に評価が低い。筆者は「革命」(辛酉)の年に発足した事を天意と捉え、歴史の進歩に寄与した其の意義を主張したい。

262) 註259に同じ。

263) 毛沢東が言う「輿論一律」(全ての輿論は党の意志に沿って統一する)を、揶揄的に擬もじった筆者の造語。

264) 日本では「中山装」は孫文の名・孫中山と共に馴染みが薄いが、「人民服」に対する一部の人の

- 毛嫌いは名称にも一因が有ろう。
- 265) 他に「列寧帽」も有り、建国後に男性が室内で帽子を被る習慣が暫く続いたのは、ソ連流の影響とも言われる。中国の脱ソ連に連れて「列寧装」と共に消え、語彙自体も言わば歴史の博物館に入ったが、海外で「レーニン服」が余り聞かないのは、レーニン様式の短命の所以だとも思われるし、中共独創の概念の可能性も否めない。
- 266) 『広辞苑』では「止揚」と「揚棄」の両方が有るが、語釈は前者の方に記された。独逸語のAufhebenの「否定」「向上」「保存」の意から、諸矛盾の諸契機の統合的發展を表わすヘイゲル哲学の此の用語は、中国では「揚棄」で対応するが、日本流の「止揚」に比べて換骨奪胎の語感が強い。毛沢東は「文革」発動の論理として、「不破不立、不止不行」(破らねば立たず、止めねば行かず)と唱えたが、「破」先「立」後、「破」先「止」後の「破」字当頭(「破」の1字が先行する)には、「揚棄」の戦闘的激情の投影も見取れる。存在と意識の相互規定に即して考えれば、物足りない「止揚」を止めて強烈な「揚棄」を選好するのは、中国人の国民性の所産とも言えべきかも知れない。
- 267) 厳密に言えば、中華人民共和国の「国父」は毛沢東に他ならないが、当人は孫夫人・宋慶齡を「国母」と呼んだ事が有り(林克『我所知道的毛沢東 林克談話録』, 中央文献出版社, 2000年, 153頁), 建国当初から宋を国家副主席に据え(註237参照), 国慶節等の際に孫文の肖像画を天安門広場の真ん中に置かせた。中共建国の準備段階では「中華民国」を略称とする案も有った(『毛沢東入主中南海』, 261頁)が、何れも国・共の同根性を窺わせている。
- 張濤之『中華人民共和国演義(6)』にも「国母の逝去」が出た(199頁)が、其の逝去の10日前の1981年5月15日に中共入党の申請が認められ、翌日に国家名誉主席の称号が授けられた事は、「国母」を懐柔し政治的に利用する中共の巧妙な統一戦線工作の手本だ。
- 268) 陳水扁は其に対する疑問や批判を気にしたのか、後にわざわざ孫文への尊敬の念を表明したが、孫文の存在感が浮き彫りに成った一幕である。
- 269) 毛沢東は1964年8月18日に北戴河で数人の哲学者と懇談する際、「一尺之極, 日取其半, 万世不竭」を引いて、坂田昌一教授の基本粒子無限可分説を支持した(林克・凌星光著, 凌星光訳『毛沢東の人間像』, サイマル出版会, 1993年, 112頁)。出所が明記されなかった其の命題は『莊子・天下』の目立たぬ1節で、「極」も現代ではほぼ廃語と成ったが、其ほど毛は教養が高く感性が一般人から遠く離れていた。
- 270) 1979年ノーベル物理学賞を受賞したグラショウ(米)が1977年の国際シンポジウムで、物質を構成する全ての仮設的要素を「毛粒子」(Maons)と命名し、自然界には更に深い統一が存在すると一貫して主張していた故毛沢東主席を記念するよう提案した(註269文献, 114頁)。
- 271) 「不生不滅・亦生亦滅」は筆者独自の表現の心算だが、中国に於ける対立・統一の弁証法や対の修辞の伝統を考えると、既に主張された命題の様に思われる。又、「不~不~・亦~亦~」の対は、『論語』の冒頭の「不亦楽(悦)乎」を連想すれば知的愉悅を感じる。
- 272) 『新約聖書・ヨハネの福音書』12・24:「好く好く貴方がたに告げる: 一粒の麦が地に落ちて死なねば、其は只一粒の儘である。若し死ねば、豊かな実りを結ぶ様に成る。」(複数の中国語・日本語訳に基づく)本稿で論じた「文革」後「脱毛」初動期の百年前の1880年、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の題辞に此の名言を引いた。思うに、其の生死・榮枯の弁証法こそが中国思想に通じるが、『論語』等の等身大・溫柔(註201参照)の誘導と対照的な高圧的説教調は、中国に於ける基督教の受容度の低さの一因を窺わせる。

- 273) 鄧小平は長らく「半退」を以て「全退」を回避し、天安門事件後に漸く名義上の「全退」に踏み切り、実質的に「半退」に止まったが、「全退」は此处で全員退場をも指す。
- 274) 2003年3月の香港誌の報道(香港空港の売店で立ち読みした筆者のメモは、資料の山に埋没し発見できず仕舞いだったが、誌名には「明」や「鏡」が記憶に残っている)。香港誌の大陸情報は一般論として、日本の週刊誌以上に憶測が少なくない。元外相・銭其琛はデマ製造が専門の情報操作が海外に多く有ると喝破した(『外交十記』, 世界知識出版社, 2003年, 376頁)が、返還後の香港が其の域外に該当するか否かは興味深い。
- 香港『亜洲週刊』が報じた華国鋒の最近の離党申請も、同誌の信憑性に定評が有るとも言え真偽は判らない。但し、党の路線や腐敗に失望したと言う動機は、有り得る話として世相を映す明鏡に成ろう。
- 275) 毛沢東時代には英雄的女性党員を「党の女兒」と表わす賛辞が有ったが、指導者を「人民の息子」と言う表現は目にした事が無かった。周恩来逝去の際の東欧党首の弔電に出た左様な言葉は、当時の中国人には新鮮で且つ違和感を与えた。封建的家長制が障碍の根源と考えられるが、蘇叔陽に由る伝記・『大地的兒子 周恩来的故事』(1982年) 辺りから然様な心理は変った。「天之驕子」はジンギスカンを称揚する成語で、毛沢東は詞で「一代天驕」の形で敷衍した。「龍種」は中国独特の語彙であるが、ハイネの比喻を借りて修正主義者を批判したマルクスの言葉は、自分は「龍種」を播いたのに収穫したのは蚤だと訳された。
- 276) 『論語・為政』の孔子語録：「吾十五而志於学，三十而立，四十而不惑，五十而知天命，六十而耳順，七十而從心所欲不逾矩。」
- 277) 鄧小平は耳が遠く、会議で毛沢東から遠く離れて座る習慣が有ったので、自分を敬遠している様な印象を毛に与えた。彼は諺の「聾子不怕天雷打」(聾は天雷が落ちてても恐くない)で聞き直った事が有るが、「聾」の「龍+耳」の字形は首領と情報の不即不離の關係に暗合する。情報が遮断されがちで且つ意識的に情報を遮断する必要も有る中で、猶且つ孤独の決断が求められる首領の宿命は、「聾」と壟断の「壟」との音通・形似に象徴される。
- 278) 目・鼻・口・耳の無い中央の王・渾沌を不憫に思い、南海の王と北海の王が好意から其の顔に1日毎に1つ穴を開けたが、7つ目の穴が出来た途端に渾沌は死んだ、と言う。
- 279) 「帯(領)頭羊」は羊の居ない日本では馴染まない概念だが、好い意味の統率役の比喻として最近よく使われるのは、羊の放牧の多い西北に長く居た胡锦涛・温家宝の時代らしい。「ボス羊」の訳し方は暗黒街の頭を連想させて宜しくないと言う指摘も有るが、日本語の「ボス猿」は必ず負の意味が強くない。
- 因みに、群れの中で最も強いとされる猿に冠す「ボス猿」の名称の発祥地は、野生猿の餌付けで有名な高崎山自然動物園だが、同園を運営する大分市は此の頃、1953年から使われて来た此を廃止し、1980年代から研究者の間で定着した「オス」に改めた。日本猿の群れの中に個体間の優劣序列が有るが、最上位の猿が「外敵に立ち向う」「群れを率いる」等のボス的行動を取らない事が、近年の研究で判った。(『京都新聞』2004年2月17日夕刊)
- 280) 「小沢一郎は田中角栄の秘蔵っ子」の様に、此の比喻は日本でよく使われるが、中共では元々「親分・子分」の図式は成立しないし、隠し子(中国語では「私生子」)を連想させる「秘蔵っ子」は中国人には馴染み難い。
- 281) ネクタイは中国語で「領帯」と言うだけに、其の赤は「領導人」(指導者)の「帶領」(引率)の指向性の表徴として意味深長だ。

- 282) 「清一色」は「字一色」「緑一色」「混一色」と同じ麻雀用語で、中国では同質の人・物の集まりに譬えられる。建国直前に国民党政府の和平談判代表団の成員・劉斐が毛沢東に対して、麻雀の「清一色」と「平和」の何方を好むかと訊ねた。中共の独裁を望むか他者も受容するかと暗に聞く意図を察して、毛は噴き出しそうになって「平和、平和、只要和了就行了」(平和、平和です。和に成れば結構です)と応えた。(原非・張慶編著『毛沢東入主中南海』、中国文史出版社、1996年、148頁)麻雀用語の「和」は「引き分け」や「調和」の意も有るので、「幽默」家・毛らしい多重的滋味を持った当意即妙だ。
- 283) 「文革」中に大陸全域で革命委員会が設立された事は、「全国山河一片紅」と形容された。
- 284) 建国後初の党大会で選出された主席・副主席・総書記の6人は、何れも現役軍人ではない。2年後の1958年に毛沢東の発案で林彪が副主席に就任したが、振り返れば其は軍事独裁体制の序幕であった。
- 285) 海外で「毛制服」や「人民服」と呼ばれる物は、ならぬ中国流で言う「中山装」なのだ。毛沢東が「文革」初期から拘り続けた軍服こそ、彼の個性や其の時代の精神の表徴と成り得よう。
- 286) 筆者は数年前に周恩来の母校・天津南開中学を見学した際、身形の自己点検の為に入口に設置された鏡が特に印象的だ。解放軍の駐屯地でも似た仕組みが有り、同じ様に第1釦を確り締めているか否かが要点の1つと成る。
- 287) 陳毅は外相時代に業務用に背広を着用したが、着熟し愛用するには至らなかったものの、早年の仏蘭西留学経験も有って違和感が無かった。彼が初代市長を務めた上海では、「文革」直前の党書記と市長は新4軍時代の部下であり、『新4軍軍歌』(註257参照)は上海人民広播電台(ラジオ局)の毎日の開始曲と成っていた。「文革」中から直近まで「上海閩」の風評や酷評は絶えないが、上海は斯くして建国後に派閥の伝統が有る。「新4軍閩」の誇りが出なかったのは、政治的野心の無い陳毅の人柄に先ず帰すべきかも知れぬ。
- 288) 「搞建設要利用外資和發揮原工商業者的作用」、『鄧小平文選』第2巻、157頁。
- 289) 其の日を選んだ理由は当然ながら不明で、深意が無かった可能性は寧ろ高いが、『鄧小平八次南巡紀実』(註242参照)の記述では、新年過ぎて早々に地方へ出掛けたのは熟慮の結果とされ、南巡の背景として1991年の国際社会の激動が挙げられ、湾岸戦争も一連の尋常ならぬ出来事に入っている(223頁)。
- 290) 1987年1月17日、厚生省が神戸在住の女性を日本初の異性間感染に由るエイズ患者として認定した。社会に激震が起きる中で、当人は3日後に29歳の生涯を閉じた。
- 291) 1987年1月16日、胡耀邦が政治局拡大会議で総書記の辞任を強いられた。「1.16政変」とも呼ばれる電撃的解任劇は当日の晩に公表され、翌日に党中央文書を以て全党への詳細な説明が行われた。
- 292) 香港誌・『九十年代』1991年6月1日の記事に拠ると、鄧小平は其の頃こんな事を言った。「私を改革・開放の総設計師だと言うなら、趙紫陽は総工程師(総技師)だ。彼を否定しては行けない。過去の指導者を全て否定したら、党の歴史は無くなって^{しま}了う。」「胡耀邦は死ぬのが早過ぎた。大変、惜しい事をした。彼は馬鹿な事をしたが、悪事を働いた事は無かった。趙紫陽の主な誤りは、学生の動乱を支持した事である。彼はとても聡明で、アイデアも多い。」

上村幸治は鄧の周辺が意図的に流した情報と捉えて、次の様に分析した。「これは、2つの事を表している。1つは、2人の後継者を切り捨てざるを得なかった事に対する後悔、今1つは現在の指導部、江沢民・李鵬に対する不満だ。/ “悪事を働かない” “アイデアが多い” という評

俚を、中国の人なら必ず裏読みする。江沢民・李鵬は“悪事を働く”が“アイデアが足りない”と言う事だと見做す。」(『中国 権力核心』, 133頁) 基本的には其の通りであるが、後悔の本気度に関しては吟味の余地がある。

続きの「にも拘らず、保守派は引かなかった」に即して言えば、鄧の評価にも拘らず趙の軟禁が解除されなかつたのは腑に落ちない。其ほど「動乱支持」の罪が深く許し難いと解釈すれば其までだが、「聡明」の誉れが一層「悪事・非力の枢軸」の警戒を強め、益々「放虎帰山」(虎を山に帰す。危険人物を野放しにする。禍根を見逃す)が困難に成ったとも取れる。引退後の鄧の影響度・拘束力の低下も考えられるが、件の発言は現状打開の為の起爆剤や牽制球に過ぎず、自分の過去の決断や現指導部の権威を否定する意図が余り無い、と観た方が順当であろう。「過去の指導者を全て否定したら、党の歴史は無くなって^{しま}う」と言った正論も、自身の名誉や体制の安定を慮る節が隠れていると裏読みできる。

- 293) 曹操は酔って部下を刺し殺し敵の離間計に嵌まって部下を処刑した後、直ぐ後悔したものの面子の関係で顔に出されず、葬式や遺族への手当を手厚くする形で遺憾の意を表した。鄧小平も仮に胡耀邦処分の行き過ぎを多少感じたとしても、当然ながら明確な自省を示すわけが無かった。南巡は其の隠微な意図の有無・強弱に関わらず、5年前の同じ頃の「反自由化」の不評を打ち消す効果が十分に有った。
- 294) 唐山と阪神の大地震での両国の失態を比べれば、日本の方が罪深い様に思う。北京に在る国家地震局が震源を特定できず、手探り作業で要員を方々へ走らせた一幕は、東漢の張衡が132年に世界最古の地震計を発明した中国の名誉を傷付けた(銭綱『唐山大地震』[解放軍文芸出版社, 1986年], 日本語版[蘇錦・林佐平訳, 朝日新聞社, 1988年] 295~304頁参照)が、19年後の日本では最先端の設備を持っておりテレビ中継も流れたにも関わらず、当日の政府の反応の鈍さに対応の粗末さは呆れる程だ。当時の中国は自力更生に拘って外国の援助を断り、後に国防部長と成った遲浩田等の当事者の反省(同上, 243~249頁)で間もなく是正されたが、阪神大地震に於ける外部救援への謝絶は、官僚の事無かれ主義や入国手続きの煩雑が要因である。
- 295) 中国では多くの文献に出ているが、緊急召喚の様子を克明に再現した中央警備責任者の回想が特に面白い(産経新聞社「毛沢東秘録」取材班編著『毛沢東秘録』下56~59頁参照)。
- 296) 中共が北京を首都に選んだ政治的理由は、ソ連に近く安全保障上に好い事であった(『毛沢東入主中南海』, 281頁)が、朝鮮戦争で脅威を感じソ連との反目で逆に裏目が出たのは皮肉だ。地政学的危険が時代と共に変化し得る事の好例と言えるが、中ソ和解後の軍事的緊張の緩和にも拘らず環境の悪化で遷都論が台頭したのは、経済優位時代の地理経済学的危険(筆者の造語)の重みを思わせる。翻って、日本で国会の承認を得た遷都は「失われた10年」で遅々と進展せず、一極集中の歪みと大地震震来の懸念は解消されぬ儘だ。
- 297) 唐山大地震を天の悪戯としたのは不真面目や不遜かも知れぬが、天の悪戯(中国語 = 「悪作劇」)に因る不運は歴史に屢々現れる。2発目の原爆が天候の所為で小倉でなく長崎に投下されたのも、同情に堪えない文字通りの天の悪戯である。
- 298) 『辞海』の「唐山」の語釈。未記載の語源を『角川大辞源』に求めて見ると、「中国のこと。江戸時代の日本人の呼び方。もと、海外にいる中国人が本国を称す言葉。唐土」と書いてある。『広辞苑』に未収録の此の意味は今の中国では廃語に近いので、両書の不得要領は止むを得ないが、唐人(中国人)の「唐(中国)の山河」(国土)と解し得よう。
- 299) 銭綱『唐山大地震』, 日本語版 7~8, 368~369頁。

- 300) 「天網」は老子の「天網恢恢，疎而不漏」に因んだ表現で、「災厄の枢軸」は「邪悪の枢軸」を
もじ
擬った筆者の造語。
- 301) 無職独身の患者は7年前に男性同性愛者の外国人船員と同棲し，別れた後に多数の日本人を相手に
に売春した（『朝日新聞』1987年1月18日）が，国際港の土地柄を窺わせる。2000年4月に神戸
の役所が市民団体の抗議を受けて，外国人不法滞在を通報するHPを閉鎖したが，不法滞在摘発
の必要性和差別助長の懸念の間で板挟みと成った処も，神戸の特殊性の現れと思える。
- 302) 「非典」退治を「硝煙無き戦争」と形容した胡錦濤の表現に因んだ筆者の造語。「禽流感」^{トリインフルエンザ}発生
後に温首相が素早く被害地域に飛び重視度を示したが，曾て胡総書記がマスクを付けずSARS治
療前線を視察した時ほど悲壮感が無かったのは，悲劇の再来には喜劇の性質が多い事の証であ
る。
- 303) 香港返還直後の1997年秋，香港で禽流感^{トリインフルエンザ}（鶏流感）が発生し，大陸から輸入した鶏が原因と疑
われ，百万羽以上の鶏や鵝が処分される羽目^{はめ}に成った。「食在香港」（註305参照）の裏の「食材
在大陸」の実態が表面化した此の出来事は，香港返還の翌日に泰で始まった亜細亜金融危機と同
じく，平和的移行の「好事多磨」を思わせた。
- 304) 百年来の地球規模の流感史を繙くと，数々の興味深い発見が出て来る。流感の病原病毒が発見さ
れた1933年より先立って，1847年の倫敦発流感，1889～90年の「旧ロシア風邪」，1918～1919
年の「スペイン風邪」等の大流行が有った。其々世界景気長期波動の底と『共産党宣言』刊行の
前夜，'89年の激動の節目（本文・註359参照），第1次世界大戦の終盤に当たった時機は，天災と人
災の相関を思わせる。

全世界で6億人が感染し2千3百万人の死者を出し，「曾てのペスト（黒死病）の惨禍を想起さ
せる疫病史上の一大事件」の場合は，「その原発地について，最も可能性の高いのはアメリカと
中国であった。1918年早春，アメリカの兵営でインフルエンザの発生があり，時恰も第1次大戦
の最中，4月にはフランス戦線に感染し，6月イギリスにこれが移り，“スペイン風邪”と呼ば
れるに至った。これとほぼ同時に，中国の本土と日本の海軍でインフルエンザ発生が報告され，
5月に中国全土に蔓延した。」（平凡社『世界大百科事典』第3巻，1988年，118頁）米軍が疫病
神と成った点と中国の被害・伝播の役割は，85年後の新世紀第1次「大覇」（覇権大国）対「小
覇」（覇権小国）の熱戦，及び発展途上最大国の「硝煙無き戦争」とだぶる。

一方，1957年の「亜細亜流感」と1968～69年の「香港流感」も，中国は発生源であったと見
られる。香港政府の医療管理局の関係者は，香港を起点とする大型風邪が多い説に対して斯く反
論した。「実は，それらの震源地は広東省なんです。農家やレストラン周辺で飼われている家畜
動物の保有するウイルスが，突然変異を起して人間に感染し，香港経由で亜細亜に広がるパター
ンが増えている。」（勸堂流『SARSの衝撃』，実業之日本社，2003年，31頁）

其の一連の事例は「中国危険」の格好な材料に成り得るが，「新沙皇」（新ツァーリ）「沙林」
（サリン）「沙氏」（SARS）の連環（註327参照）から，「旧ロシア風邪」の現代「翻版」（複製）
とも言える「ソ連流感」は，老大国の沈澱・腐臭と一味違う超大国の喧騒・不穩を顕わす。1977
～78年にソ連流感が猛威を振るったが，其までの3回の大流感は奇しくもソ連の建国直後の始動
期，人工衛星発射の絶頂期，チェコ占領・中ソ国境軍事衝突の暴走期に当る。

香港・ソ連に次いでアフリカが流感の発症源と言われたのは，ソ連解体・香港返還の1990年代
の事である。目下は大流感の10年周期の間歇期に当る事も有り，歴史が浅い故に馴染みが薄く実
感も乏しいが，「病毒の2大発症地はアフリカと中国」と言う欧米の疫病学者の常識（勸堂流

『SARSの衝撃』, 34頁)を思い起せば、此等の広域の人類地文化的危険の高い蓋然性が思い当たる。

毛沢東は1958年の詩・『送疫神』(疫病神を送る)で、江西省余江県に於ける日本住血吸虫の根絶を講えた(本文・註340参照)が、其の前年頃に華南発の疫病神が香港の名を冠して送り出されたのは、皮肉な巡り合わせである。1993年の広東発、香港経由の「禽流感」の発生は、香港流感と通じる「疫神」の不易・遷移を感じさせる。エイズ出現の12年後に降り掛かって来た此の怪病は、更に10年後のSARSと同じく突然変異の所産だが、被害対象が家禽から人間に移った2回の災厄は、俱に上記の人畜共生の自然摂理の想定し得る結果だ。

305) 泳いで渡れる河で隔たった広州と香港、中国と北朝鮮は、「一衣帯水」の典型と言える。日・中の官民は此の成語で両国の近隣関係を形容するが、長江を1本の衣帯に譬えた『南史・陳本紀』の原義に照らせば、両国間の広い東海は狭い水域の形象と乖離が大き過ぎるので、言葉の綾で紡ぎ出した幻想とも思えなくはない。

306) 邱永漢の随筆集・『食は広州に在り』(龍星閣, 1957年)は、食べ物に関する戦後の3大名著の一とした丸谷才一評の様に声価が高いが、香港返還の直前に書いた「食道楽メッカの香港」の中で、1950年代以降は料理に千金を惜しまぬ人々が香港に集まった結果、「食は広州」は実質香港に引っ越していった、と述べた(『中国の旅、食もまた楽し』, 新潮社, 2000年, 64頁)。

307) 「粵」と「越」の同音は、広東と東南沿海の浙江(昔の越)や越南との文化縁を思わせる。因みに、広東と浙江の地方戯曲は其々「粵劇」、「越劇」と言う。

308) 香港に於ける表現の自由は帰還後に微妙に縮まった様だが、2003年に西北大学日本人留学生卑猥寸劇事件が香港筋の報道で西安の反日示威を惹起した事は、自由と不自由、権利と秩序の相対的關係を考えさせた。

309) 『史記・酈食其伝』の「民以食為天」(民は食を以て天と成す)は、中国人社会の共通認識と成っている。毛沢東も早年の『「湘江評論」創刊宣言』(1919年7月14日)の中で、「世界上什么问题最大? 吃飯問題最大。」(世の中で何の問題が最も大きいか。飯を食う問題が最も大きい)と語った。彼は自ら主催した湖南学生連合会機関誌の発刊の辞で、社会制度の中で最も重要なのは経済制度だとも断言したが、晩年には其の初心から離れた。

310) 『角川大辞源』に拠れば、「語」は「形声。意符の言(ことば)と、音符の吾(對抗して答える意=禦)とから成る。質問に對抗して答える言葉の意。ひいては、“かたる”“ことば”などの意に用いる。」「吾」の第一人称代名詞の意に即して、「言+吾」の字形を「語」の自己主張の性質の徴と捉えるのは、断るまでもなく筆者の今風の講釈なのだ。

但し、其の対抗的回答も我田引水で言語表現の自我性に帰せる。キッシンジャーに秘密を吐かせ「一生の不覚」と嘆かせた伊太利記者・ファラッチの取材に、鄧小平が大変な気合いで臨み名答を多く遺した一幕(張涛之『中華人民共和国演義(6)』, 183~186頁)が、好例に挙げられる。『鄧小平文選』の「文革」後部分に外賓との談話が多いのは、世界に向けて発信する姿勢と共に、孔孟の語録と似た自己主張の方式も窺える。対して『毛沢東選集』は会談録が極端に少ないが、其の文章に拘る書齋派の志向は行動派の鄧と異なる。

311) 『孟子・告子上』:「食色, 性也」。此を例に挙げた『角川大辞源』の「食色」の解は、「飲食と女色。食欲と性欲」と言うが、刊行12年後の日本の「逆軟派・男喰い」の世相を観れば、「女色」は些か古色蒼然である。

『角川大辞源』の「食色」は、「飢えた気配の無いこと。食べ物のある様子。〔左伝・昭公15年〕“猶有_レ食色_一、姑修_レ而城_一”」と言う。「豊衣足食」(衣が豊かで食が足りる)の時代が滅多に

- 無かった所為か、此の用法は中国で廃れて久しいが、俗に言う「温飽思淫欲」(衣食が足りれば淫欲が湧く)の摂理と合わせて、又「食色、性也」の命題に繋がる。
- 312)「別口」は日本語の「捌け口」の字・義、及び「酒は別腹」の俗語に因んだ筆者の造語。好物の多飲・多食を正当化する「別腹」は、二重基準や「双軌制」(複線構造)の多い中国人にも、啞然とさせられる不羈な発想である。食欲・性欲の「別口」は又、別々の口を含みも有る。垂細垂最大の歓楽街の名物案内人・李小牧(湖南出身)は曰く、「飲食、色情満載の歌舞伎町、既充実上面的口、更満足下面的口」(料理・風俗に溢れる歌舞伎町。上の口も満足でき、下の口はもっと満足できる)と言う(『新宿歌舞伎町アンダーワールドガイド』、日本文芸社、2003年、24頁)。
- 313) エイズの発生源は未だに定説が無く、米国諜報機関が撒き散らしたとする陰謀説も含めて、色々な推測や憶測が飛び交うが、アフリカは紛れも無くエイズの集中発病地域だ。
- 314) 開幕式の国歌演奏との組み合わせは、「マルクス主義者に成る前も、成った後も中国人」と言う毛沢東の自己規定や、鄧小平の「中国的社会主義」路線の秩序の表徴に成る。
- 315) 2001年に入る直前の節目の時機に、プーチン政権はスターリンが制定したソ連国歌の旋律を新露西亜国歌として国内に始めて公式に放送した。
- 316) NHK特集『63億人の地図 寿命 2004年いのちの旅』(2004年1月25日放送)に拠ると、ソ連解体後10年で露西亜男性の平均寿命は約5歳減り58歳台に下がったが、地域別の統計は下落率と転職率の正比例を示し、精神的緊張が元凶である事を裏付けた。
- 317) 勸堂流『SARSの衝撃』は曰く、「“ウイルスの2大発症地域はアフリカと中国”。これは欧米の疫病学者の間では、常識に成っていると云われる。」(34頁)副題の「台頭する中国隔離論と破綻する“世界の工場”」が示す様に、此の書物は中国への敵意の露出が多いが、アフリカ並みの不衛生は否認し難い一部の現状である。
- 318) 「強盛大国」は北朝鮮が1998年に打ち出した国家目標だが、中国の長年の志向の後追いの観が有る。五輪で獲得した中国初の桂冠が男子個人射撃である事は、鉄砲から生まれた政権の「軍先」の強みを謀らずも印象付けた。
- 319) 国民の1人当りのカロリー摂取量は世界衛生組織が定めた理想的水準に近付いた、と言う1980年代後期の中国の公式発表は、長年の食生活の質の低下を認めた素直さと世界の常識へ接近する姿勢が画期的だ。
- 320) 祁英力著、おうちすえたけ訳『胡錦涛体制の挑戦』、勉誠出版、2003年、91頁。
- 321) 『角川大辞源』の「欲」の解字は曰く、「意符の欠(口を開いた形)と、音符の谷(穀食の意=穀)。また、続けて止まない意=続(つゞ)とから成る。口を開いて穀物を求めて止まない、“ほつする”意。」中国語の「谷」は「穀」の簡略字でもあるが、穀と谷の共通点には謙虚さがある(「虚心坦懐」に当る中国語は「虚懐若谷」。穂が熟すほど垂れると言う比喻は両国共通)。故に「谷+欠」は此の文脈で、驕傲の転落の契機とも解し得る。
- 322) 親に寵愛される独りっ子の異名・「小皇帝」の起源や発生時期は不明だが、皇帝を此の上無く尊ぶ伝統觀念の名残りとして興味深いし、「小皇帝」・溥儀や「児皇帝」・劉禅(劉備の息子)の頼り無さを連想させる処も妙味だ。
- 323) 米国人のカロリー摂取は1970年代の3000kcal程度から、最近の3800kcal前後に上昇した(出所は註316に同じ)。其故の肥満者の増加は昨今の日本でも特に青少年の場合が顕著だが、中国では脂肪類好みの性向、「小康」(一応の余裕)の実現、「小皇帝」溺愛の風潮の相乗で、同じ傾向が幼児世代から台頭・加速している。

324) 「少則得, 多則惑」は老子の言。

325) 週刊『アエラ』の記事・「若者よ セックスを嫌うな 自信喪失男と潔癖すぎる女」(2004年5月3・10日号, 16~19頁) 参照。日本のコンドーム出荷量は直近1993年のピークから4割も落ち、インターネットやDVDの普及で'97~99年に減少傾向が鮮明に成った、と言う記述も「第2の敗戦」と結び付けて興味深い。

326) 「孤寒」は『警世通言』等の用例の様に、孤独・貧寒を表わすのが原義なのだ。吝嗇の意は広東方言の用法であるが、吝嗇の含みを持つ「寒酸」(貧相)と同じく、「人窮志短」(貧すれば鈍する)の相関を言い得て妙だ。

327) AIDSの中国語訳には「艾滋」や「愛死」も有り、後者は瀬戸内晴美に気に入られ、長篇小説(講談社, 1994年)の題に用いられたが、「艾滋」も中国独特の滋味を隠し持つ。「艾」は「++ + 乂」の字形で不毛と罰劫を連想させ、「愛・哀」と同音のaiの読み方も有り、「怨艾」(怨恨)の連用も有る(此の場合はyiと読む)ので、「滋生」(繁殖する。生み出す)との合成の略の様な「艾滋」は、エイズ禍の実態と妙に符合する。

SARSの中国語訳・「非典」は「非典型性肺炎」の略で、「非」は「肺」と音通で否定的意味を持つ処も妙味だ。最近は音訳の「薩斯」も流行っており、外来語の受容度の向上と安易な音訳の増加の例に挙げられた(国際シンポジウム「世界の 外来語 の諸相」に於ける徐一平・北京日本学研究中心教授の報告、『読売新聞』2004年4月13日夕刊)が、「得克萨斯」(テキサス)や「盎格魯撒克遜」(アングロ・サクソン)を連想させる点では、「黃禍」の形象を転嫁する効能も読み取れる。

猶、香港流の「沙氏」の訳し方も感心できる。黄沙や「沙林」(「サリン」の中国語訳)を含む形象と文明病に似合う擬人化の「氏」、更に「殺手」(殺し屋)に近い響きも加わって、見事な「黒色幽默」(ブラック・ユーモア)と言えよう。

328) 世界最古の職業は一般的に娼婦とされるが、其を暗黙の前提とする2番の諸説は面白い。2番目に古い職業の王族を自分は務めていると言う英国皇太子・チャールズの冗談(杉光二『東京異邦人プロステティート』, 光文社ペーパーバック, 2003年, 152頁)は、醜聞に纏わった男らしい笑いの取り方だ。一方、海野弘は『スパイの世界史』(文藝春秋, 2003年)の中で、フィリップ・ナイトリーの『第二の古い職業 愛国者, 官僚, 空想家, 娼婦としてのスパイ』(1986年)を引き合いに出して、「スパイは歴史で2番目に古い職業だ、と言われる(1番目は売春である)」と語った(15頁)。英語通訳の達人・小松達也は通訳こそ「人類の歴史上2番目に古い職業」とし、通訳や翻訳に最も依存している国として、明治維新以来貪欲に海外の思想・制度・技術等を取り入れて来た日本を挙げた(『通訳の英語 日本語』, 文春新書, 2003年, 15頁)が、情報や外交の接点で其々スパイや王族と通じるのが奇妙だ。女性差別への配慮からか彼が言及を回避した筆頭は、巡り巡って露西亜語の名通訳・米原万里に由って喝破された。其の文筆家の名を欲しい儘にした『不実な美女か 貞淑な醜女か』(徳間書店, 1994年)の中で、先輩から受け売りした「通訳 = 売春婦」論が社会的需要や仕事の性質に即して敷衍された。

娼婦を最も古い職業とする観方は尤もらしいが、人間の欲望を肯定し「笑貧不笑娼」(貧乏人を嘲笑しても娼婦を嘲笑しない)と割り切る中国で、「操皮肉生涯」(肉体を売って生計を立てる事) = 最古の職業と言う相場が流行らぬのは、興味を引く現象である。儒教の「万惡淫為首」(淫行が諸惡の頭を為す)の觀念に、一因が有ろうと思われる。

329) 中国語独特の「陪斬」は、重罪の犯人や尋問対象を死刑囚と共に処刑場に行かせ、疑似処刑の衝

- 撃によって懲罰を与えるか自供を促す事に言う。悪毒い手段も辞さぬ無法国家らしい遣り方と思えるが、類義語の「陪綁」(綁 = 縛る)は苦難を分担させる意が強い。
- 330) 陳希同は天安門事件の際に事態を誇張に伝え武力鎮圧の決断を導いたと言われるが、真偽はともかく、「誤導」が最近の中国でよく使われている事は、misleadの訳語が依然として無い儘の日本より一歩進んだ様に思える。
- 331) 韓文甫は『鄧小平伝 治国篇』(台湾・時報文化社、1993年)の中で、胡耀邦の元智囊・阮銘の「大陸演变的3種可能」(香港『百姓』半月刊、1992年10月1日号)を引いて、「殺20万人換取20年江山穩定」云々は巷の噂の様に鄧小平や王震ではなく、姚依林の婿・王岐山の主張なのであるとした(810頁)。中国人民銀行副総裁、海南島省長を歴任した王は、有能な「太子党」として評判が高いが、義父の姚依林(長年の経済担当の副総理)は天安門事件の際に、政治局常務委員会の中の鎮圧支持派だったとされる。
- 332) 第1次天安門事件の際の北京市長・吳徳は「文革」後間も無く、毛沢東寄りの「新4人組」の一員として指導部から姿を消された。
- 333) 2回とも毛が最終号令を出した事は、江沢民時代の多くの文献で明らかに成ったが、首都での武力鎮圧は其ほど超高度の政治判断が要る。
- 334) 『角川大辞源』の「政」の解字は、次の様になっている。「形声。意符の攴(手にむちを持ってうつ)と、音符の正(うつ意=討)から成る。武器をもって討つ意。ひいて、“まつりごと”の意に用いる。一説に、会意形声で、正は、ただしくする意と音とを示し、強制してただす、ひいて、“まつりごと”の意に用いるという。」
- 335) 情報技術革命時代の青写真を描いた米国の未来学者・A・トフラーの著書(1980年)の題。
- 336) 「心中攻撃」は和製漢語の「心中」(中国語では「同歸於尽」と、「真珠湾攻撃」との発音の類似に因んだ筆者の造語。
- 337) ルーズベルトは真珠湾襲撃を察知して置きながら、日本へ宣戦する為わざと知らぬ振りをした、と言う邪推は消えては現れたが、『ルーズベルト秘録』に記された当時の大統領府の大恐慌を觀れば、一蹴して構わない。「真珠湾攻撃は史上、前例を見ない奇襲だった事は、この慌てふためきぶりからも十分に窺える。それでは一体何故、これほどの軍事作戦に米国は気づく事が出来なかったのか。真珠湾攻撃を経験した米国は以後、激しい怒りと同時に身を割くような自省に悩まされ続けた。」(下、221頁) 9.11襲撃に関しても米国が敢えて見過ごした陰謀説が流れたが、60年前の歴史の再演と捉えた方が正しかろう。
- 338) 「千里眼、順風耳」は『紅樓夢』第29回の用例の様に^{ついで}対で使う場合が多いが、「順風」が必ずしも天意とは限らず人為的に造り出す場合も有る処が味噌だ。
- 339) 毛沢東の詞・『滿江紅・和郭沫若同志』(1963年)は、「要掃除一切害人虫、全無敵」で結ぶ。
- 340) 毛沢東『七律二首・送瘟神』(1958年) 日本語訳 = 竹内実(武田泰淳と共著『毛沢東 その詩と人生』、314頁)
- 341) 「^{コンピュータ}電腦2000年問題」の原因は遂に解明されず仕舞いだったが、両方とも有力な説であり、今後も他の分野で別の形を以て現れて来そうだ。
- 342) 『梵網經』が出典の「獅子身中の虫」は中国では聞かないが、獅子が居ない日本で定着した事は、此の国に於ける佛教の影響力を物語っている。
- 343) 2004年2月8日に米国の報道機関が提起した小ブッシュの疑惑は、州兵を務めていた1972~73年に一時無許可で隊を離れ規定の任務を満了していない事だ。4年前の選挙でも、州兵志願は越

南行きを回避する為だったと指摘された。

- 344) 天安門事件直後の1989年7月1日、国際孤立化の中の中国との関係改善を図るべく、米大統領国家安全保障補佐官が秘密裏に北京を訪問した。ブッシュは親書で鄧との個人的友情・信頼を強調し、特使も鄧との会見でボスを史上初めて中国民衆に親密に接した米大統領だと力説した。鄧は其の駐中国大使時代に自転車で北京の街頭に出た事を言い出し、一座の雰囲気が一気に和んだ。(銭其琛『外交十記』, 170～179頁) 両国の政治的必要性に因る接近であったが、此の逸話は指導者同士の親交や意気投合の効用を思わせる。
- 345) 中・米は1998年「建設的・戦略的パートナー関係」を結んだが、partnerの中国語訳・「伙伴」は「人+火」「人+半」の字形に、相剋・共生両面俱有の実質が好く現れる。「伙伴」に近い和製漢語の「相棒」は、2人が協力して天秤棒を担ぐ字形から来た「仁」の発想に通じる一方、棒で殴り合う光景をも連想させる字面は「伙」と同じ不穏な節も持つ。
- 346) 俱に1937年生まれの橋本龍太郎、小淵恵三、森喜朗3首相は、誕生日は其々6月25日、7月29日、7月14日で、奇しくも盧溝橋事件(7月7日)の近辺に集中した。
- 347) 始原的風景を表わす「原風景」も、出生時や幼時の最初の記憶を言う「原光景」も、中国語に無い語彙である。
- 348) 五木寛之『運命の足音』, 幻冬舎, 2002年, 261～265頁。
- 349) 註348文献, 26頁。
- 350) 1990年代の韓国では、「386世代」(30歳代, '80年代に大学に通い, '60年代の生まれ)の活躍が目立ったが、中国の今の注目株は「79世代」('70年代生まれ, '90年代大学在学)か。其々「文革」後と天安門事件後を指す「79」は、筆者が改革・開放元年の79年に因んで考案したのだ。猶、韓国で盧武鉉も含む政界の「87世代」が目覚しいが、1987年に政治活動を始めた人が数多く政治の中枢に入った現象(『日本経済新聞』2004年5月7日)は、原点がソウル五輪直前の民主化黎明期に当る事を考えれば、彼等の指向性が理解・予測できよう。
- 351) 「世代等高線」は地理・気象用語に因んだ筆者の造語。
- 352) 孟浩然『與諸子登岷山』。目加田誠訳注『唐詩三百首2』の「人事在代謝」(平凡社, 1975年, 85頁)は、中国の流布本(蘅塘退士編)と違うが、同工異曲に歴史の本質を表わしている。
- 353) 「与时俱進」は江沢民 胡錦濤への権力譲渡が行なわれた第16期党大会の合言葉。
- 354) 毛沢東が愛用した「必由之路」と同義の「必經之徑」は、「經・徑」の同音・形似を生かした筆者の表現。
- 355) 死の2ヶ月余りに心筋梗塞で倒れた毛沢東は、小康状態の中で世話係りに南北朝の庾信の『枯樹賦』を読ませ、次の段落を苦々しく暗誦した。「此樹婆娑, 生意尽矣! ……昔年種柳, 依依漢南; 今看搖落, 淒愴江潭。樹猶如此, 人何以堪!」(曉峰・明軍編『毛沢東之謎』, 中国人民大学出版社, 1992年, 214頁)
- 356) 本稿筆者は別の論考で取り上げた事が有るが、毛が自分の誕生日を大事にしたのも精々、長寿を祝う風習でうどんを食べたとか些かな家宴を催した程度だ。楊炳章は『鄧小平 政治的伝記』の中で、『人民日報』1984年8月23日の報道を引いて、鄧小平の80歳誕生日(同22日)祝いの様子を記した。1⁶近く高い誕生日ケーキに長寿祝福の徴として桃80個が飾られ、子孫に囲まれた本人が80本の蠟燭を吹き消そうと頑張っている、といった光景(260頁)は確かに微笑ましいが、冷厳な論評を一言添えても好かろう。指導者の誕生祝いの即時報道は透明性の向上を映し、健全な家庭人の形象の広報には成ったものの、立派な建前を破った不敵な「脱毛」として評価し難

- い。
- 357) 誕生日の公表を控える点は新世代の指導者の進歩と言えるが、翻って思えば、鄧小平時代以降の官民は神格化との訣別に困って、指導者の誕生日にはもはや興味を失った。
- 358) 「中視」は「微観」(微視)と「宏観」(巨視)の間の「中観」を擬^{もじ}った筆者の造語。日本語に於ける此の概念の欠落は不思議だが、等身大の「中視」は時間の次元で日・月を指し、年は2桁以上なら巨視の範疇に入ると考える。
- 359) 註259に同じ。
- 360) 龍年に災厄が多い事は当時でも人々に懸念されていたが、12年毎に繰り返す厄年の「本命年」意識が根底に有る。中華民族の表徴たる龍が12支の中で特に危険度が高いのは、民族の多難な宿命の反映と思われるが、2000年に大難が降り掛からなかったのは、総書記失脚の宿命から運れた事と共に江沢民の強運の証だ。中国が高緊張・高成長から中緊張・高成長の時代に入り、大衆の「高風険、高回報」(ハイリスク・ハイリターン)志向が「低風険、中回報」に変わった、という時流にも符合する事象と言えよう。
- 361) 註259に同じ。
- 362) 胡耀邦追悼会前後の1989年4月18～20日、大学生集団の中南海突入の試みが続発した。趙紫陽が訪朝の途に着いた2日後の25日、鄧小平邸で指導部と長老の緊急会議が招集され、強硬に対処する方針が決定された。
- 363) 1935年12月9日、「停止内戦、一致対外」「打倒日本帝国主義」「反对華北自治運動」を合言葉に、北京で6千人の学生が行なった示威運動。国民党当局の鎮圧で負傷・逮捕者が多く出たが、翌日に全市大学が「罷課」(授業ボイコット)に突入し忽ち全国へ波及した。
- 364) 『広辞苑』の「唇齒輔車」の語釈にも、『左伝・僖公五年』の「諺所謂、輔車相依、唇亡齒寒」が出ているが、「唇齒相依」「唇亡齒寒」は熟語化しておらず、「唇齒輔車」も辞書の中の標本の観が強い。陸続きの隣国が無い島国の感性を映す現象として、広域大陸国家故の中国に於ける高い流布度・使用頻度と対照的だ。
- 365) 軍人作家・葉雨蒙の『黒雪：出兵朝鮮紀実』(1989年)には、毛沢東から金日成・朴憲永の緊急救援要請の電報を示された彭徳懐の内心の独白として、「両国が唇齒輔車の間柄であることは言うまでもない……唇失えば齒寒しだ！」と有る(朱建栄・山崎一子訳『黒雪 中国の朝鮮戦争参戦秘史』、同文館、1990年、64頁)。記録文学に儘有る文学的表現とも取れるが、朝鮮が落ちれば中国東北も危ないと言った出兵派の論拠を観れば、毛・彭等の思考の定石として至極当然な感じがする。
- 366) 『史記・淮陰侯伝』が出典の「韓信の股潜り」と『列女伝』が出典の「孟母三遷」の物語は、「三十六計、走为上計」の兵法に通じる雌伏・逃避も見所だ。
- 367) 発言は開催2日目の4月24日に為されたのだが、米国側の公表で世界が驚いたのは翌日の事だ。
- 368) 「軍事独裁開発」は「軍事独裁」と「独裁開発」の合成。独裁は武力に頼る支配なので「軍事」は重複の観も有るが、フセインの軍事独裁と微妙に違う金正日の開発の意欲を強調したいわけだ。
- 369) 1997年2月19日、韓国京畿道城南市のアパート玄関先で、金正日の前妻の甥・李韓永(36歳)が2人組に狙撃され重傷を負った。亡命後に秘密を多く暴露した李に対する報復は、黄長燁書記が北京の韓国大使館に亡命を申請した7日後の事であるだけに、意図的「殺一警百」(一懲百戒)の制裁と思われるが、金正日誕生日(2月16日)の頃に派手な行動を起こす北朝鮮特務機関の習

性も指摘された。

370)「文革」中に竣工時期を毛沢東誕生日に設定する風習が有り、鄧小平時代では彼個人の誕生日祝いが報道された(註356参照)反面、指導者の誕生日は突貫工事の目標ではなくなった。但し、政治的節目に合わせる慣習・発想は江沢民時代にも猶健在であった。長らく賛否両論が有った国家的工程の長江三峡ダム建設を例に挙げると、陸佑楣(中国長江三峡工程開発総公司總經理)が1993年の香港『文匯報』で、大江の締め切り工事は当初計画よりも1年早くし、完成年度と香港返還の年度とを合致させて、1997年を2つの慶事の挙行の年にする、と言う意向を表明した。建設慎重派の国家計委委員経済研究所スタッフが直ちに全人大に上申し、非科学的・盲目的主張として糾弾した(戴晴編、鷺見一夫・胡暉婷訳『三峡ダム 建設の是非を巡る論争』、築地書館、1996年[原典=1989年]、132頁)。結局、「双喜臨門」(2つの慶事が訪れる)の祈願に由る工事は、反対派の作家・戴晴の嘆き(同、4頁)も空しく推進された。

2002年11月6日に長江三峡ダム第2期工事が竣工し、堰止めと式典に建設推進派の李鵬が出席した。明らかに2日後の党大会開幕に合わせた時機だが、退任が決まった現職総理の花道を飾る様に党大会開幕式の司会も彼が務めた。長江の上流に在る重慶は三峡ダム建設に伴う開発・移転と連動して、1997年に北京・上海・天津に次ぐ第4の直轄市と指定され、而も一躍に人口最多(3千万)の巨大行政区と成った。地名の「二重の慶事」の意が謀らずも現実と化したわけだが、重慶の在る四川省が本籍地(生地は上海)の李鵬が党・国の2大慶事の舞台の中心に立った事は、彼の政治的生涯の中で特筆すべき「双慶」と言えよう。

一時に三峡ダム建設と対で位置付けられた香港返還は、其の立会いを人生最後の願望とした鄧小平の逝去の半年後に実現した。鄧の遺憾は長寿の裏返し「長恨」とも成ったが、彼の最大な「憾憾」は余り知られていない。存命中に見る事が出来ない2大国家的工程として、彼は三峡ダムと有人宇宙飛行を挙げた(石磊等『放飛神舟 有人宇宙飛行プロジェクトの記録』[機械工業出版社、2003年]、日本語版[高慧文等訳、日本オーム社、2004年]10頁)。此の2つの偉業は毛沢東が詩歌で渴望を詠んだ物なので、現実主義者の鄧は浪漫主義者の毛と同じ理想を共有していたわけだが、毛の熱い夢も鄧の次の論断の通り冷静な実利志向が濃い。「60年代以降、若し中国が原子爆弾、水素爆弾の開発をせず、人工衛星の打ち上げをしなかったなら、中国は重要で影響力の有る国だとは言えないし、現在の様な国際的地位に就けなかつたろう。此等は我々民族の能力を示し、中華民族の国家の隆盛と発展の指標でもある。」(左賚春『中国航天員飛行記録』、xx頁)

毛沢東時代に黒龍江省で発見された油田は、建国15周年に因んで「大慶」と命名されたが、世紀の交で実現した香港返還と有人宇宙飛行は、建国以来の究極の大慶の双璧に当る。有人宇宙飛行の返還の時機は原爆初実験38周年の日に設定されたが、建国16周年の当月に遂げた前回の快挙と重なるのも一種の「双慶」だ。新千年紀祭を2回催した事も「双慶」の変種であるが、行事・演説好きの江沢民の意志と言うよりも、大衆の「双喜臨門」願望が生んだ結果と思える。

「福無双至、禍不单行」(福は対で続ける事が無く、禍は単発で終る事が無い)と諺は言うが、「双喜臨門」の祈願は其の現実的悲観心理の裏返しに他ならない。建国後の長い間に高級煙草の代表的銘柄の「大中華」と「双喜」は、其の「言霊」意識の表徴と観て能い。因みに、毛・鄧が好んだ「熊貓」(パンダ)の名は、稀少価値や「中国特色」、癒し効果が揃い、近年人気急上昇の「紅塔山」は字面で本稿の塔山戦闘の「総精彩」と繋がる。此の「紅」と「慶」の複合から、江沢民の大番頭で胡錦涛体制の「三駕馬車」の一員が連想される。註237で歴代の国家副主席の

顔触れを吟味したが、初代の宋慶齡と目下の曾慶紅の名も「双慶」の連環を成す。

註304で疾病史上の「中国危険」の多発に就いて論評したが、重慶の「双喜臨門」と災厄複合の「禍不单行」の文脈と絡んで、勸堂流『SARSの衝撃』の次の情報が目を引く。「アメリカの疾病対策センターが、密に注目している現象がある。それは、薬剤耐性だけでなく、様々な病原菌の結合現象だ。例えば、“重慶ファミリー”と呼ばれる病原菌が関心を呼んでいる。重慶には麻薬患者が多い事で知られ、麻薬患者の体内に生息している結核菌が、特殊な変貌を遂げた新種の菌に変貌する可能性が有ると言う。更に“北京ファミリー”と呼ばれる結核の新種や、結核とAIDSが結合した“南京ファミリー”と言われる新種の病原菌まで、米欧の一部に疫病学者の間で取り沙汰されていると言う。」(34頁)

重慶の名の此の不名誉な用法は日本語の「南京虫」を想起させるが、侵略と「名誉毀損」の二重被害を受けた南京とは別の不本意が有ろう(『日本国語大辞典』の「南京虫」の最初の用例は1885年の新聞なので、南京侵攻とは勿論関係が無い。猶、其の裏返しの不意な好い命名の事例として、天津が原産地ではない「天津甘栗」である[『日本経済新聞』2004年6月7日夕刊参照])。重慶に麻薬患者が多いとは仮に事実だとしても、英・仏・伊の其々半分に当る人口を考えれば不思議ではない。北京や南京よりも重慶が言わば「複合疫病源の枢軸」で突出するのは、20世紀の世界的流感で中国が常に発症地であった事と共に、国力指標と成る人口・領土の規模と危険の発生・増幅の相関を思わせる。「人怕出名猪怕壮」(人は有名に成るのが恐く、豚は太く成るのが恐い)と言う様に、重慶は肥大化だけでなく急成長の故に風当たりが余計に強いとも思える。「世界の工場」・中国の光と影、「脅威論」の標的にされた宿命の理解には、此の2点とも一助に成る。

尤も、政治・祭祀の相関は万国共通の現象と原理である。9.11襲撃の廃墟に建てられる「自由の塔」も、米国独立の年月日に因んで高さが1776年(541年)と設計され、2004年7月4日に工事が開始する予定だ。

371) 劉少奇は政治的生命の処刑宣告を聞く途端に、血圧が260 / 130まで上昇し40度以上の高熱を出した。病状が悪化の一途で1年後後に不帰の人と成ったが、死期を速める「催命剤」の効果は仕掛けた側の狙い通りだ。

372) 産経新聞「ルーズベルト秘録」取材班『ルーズベルト秘録』、産経新聞社、2000年、下、260～261頁。

373) 1970年12月18日、米人ジャーナリスト・スノーとの談話。「和尚打傘 無法無天」の語呂合わせ(「無法」は「無髪」に引っ掛ける)を理解できず、中国側の通訳が「孤独の僧侶」の自称と訳した話は有名だが、もう1つの見所は毛の計算尽くの意図である。彼は古い友人のスノーをCIAの回し者と疑い、此の会見を利用して米国に情報を伝えようとした、と言う李志綏の証言(新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』下、文藝春秋、1994年[原典同]、304頁)が事実なら、「孤立の枢軸」の挑発にも響いて来る。

374) 註372に同じ。

375) 国民は民兵として自衛目的の武器を所蔵・携帯する権利が有る、と定めた合衆国憲法修正第2条は、米国で銃に由る殺人の多発の根源と考えられる。只、カナダも1千万世帯に7百万丁が所持される程の銃社会なのに、其の種の犯罪が少ないのは興味を引く。2003年アカデミー賞ドキュメンタリー部門賞を受けたムーア監督の銃社会批判の映画は、正に地続きした2国の精神風土の違いへの着眼が出発点だ(猪木武徳「ボウイング・フォー・コロンバイン」[『日本経済新聞』2004年4月27日夕刊]参照)が、修正条項とは言え銃保持の承認云々が憲法の冒頭に出る事は、本稿

筆者にはやはり一種の^{カルチャー・ショック}文化的衝撃である。

猶、連載初回の註41でムーアのアカデミー賞授賞式でのブッシュ批判に触れたが、巡り巡って3ヵ月後の今次の推敲・校正中の5月には、イラク侵攻の大義の虚構や進駐軍の俘虜虐待の蛮行が暴露され、米国政権中枢の暗部を抉った同監督の『華氏911』がカンヌ映画祭で最高賞に輝いた。此の作品が政治的理由で大手映画会社・ディズニーに配給を拒否された一幕も、民主・自由を標榜する米国の欺瞞性の好例に成る。面白い事に、仏蘭西の映画祭で世界的声価が得られると、同社は忽ち「売名行為」云々の非難から一転して容認し、創業者（今は子会社の責任者）個人に由る放映権購入の形で本国上映を可能にした。

- 376) 軍国主義時代の産物と思われる和製漢語の「銃後」を擬った筆者の造語。
- 377) 北京大学生の示威や全国民衆の抗議を受けて、国民党当局は^{もじ}渋々ながら追究の姿勢を示し、米軍も一旦懲役15年の刑を下したが、後に米国で再審し判決が取り消された。
- 378) 2002年6月13日に駐韓米軍装甲車が一般道で2人の女子中学生を轢き殺し、民衆の反米情緒を爆発させた事は記憶に新しい。沖縄基地の米軍兵士が現地の女性を強姦した事件は、日米当局の嚴重な対処にも拘らず後が絶たなず、小泉首相就任後の初訪米（2001年6月30日）の前日にも起き米国を狼狽させた。今回のイラク俘虜虐待事件は米国の報道で、1968年の越南で米軍が村人数百人を虐殺し1年半も隠蔽した「ミライ事件」に^{なぞ}擬えられた。
- 379) 『辞海』の「沈崇事件」の解は、「抗議美軍暴行運動」の項を見よ」と書いた。因みに、強姦を「暴行」で表わす日本流は中国では少ないが、此の項目名が少数派の例に成る。
- 380) 「虫を殺す」（癩癩を抑えて我慢する）に因んだ表現。此の成句は「小の虫を殺して大の虫を助ける」と共に、中国語では見当たらない。
- 381) 註372に同じ。
- 382) 霍見芳浩（紐育市立大学教授）は「テロ奇襲が米国経済に与えた教訓」の冒頭で、「アルカイダ・テロネット帝国の奇襲特攻隊」と書いた（『NHKスペシャルドキュメント 世界はどこへ向うのか 9.11から1年 迷走するアメリカ』、NHK 出版、2002年、192頁）が、絶妙な比喻である。
- 383) 『ルーズベルト秘録』、上、176～182頁。「荒鷲の騎士の疑問 文明国家を本当に代表しているのだろうか」等の数節で特に目を引くのは、1927年に単独で大西洋横断を果した米国の伝奇的「空の英雄」・リンドバーグの観方だ。彼は太平洋諸島で日本軍と熾烈な戦いを交わす間に、戦地の過酷な有様や自軍の赤裸々な真実を書き遣した。「米兵の一部が捕虜を残酷に拷問している事は、誰もが知っていた。捕虜を射殺したり、手を挙げて降伏する日本兵を即座に、まるで動物の様に殺す事に、何の躊躇も無い。降伏してもどうせ殺されるのだから、（日本軍には）玉砕しか残された道は無かった。この点において米国が日本よりモラルの点で高いとは、どうしても思えなかった。」此の1節を含む1944年7月13日の日記で彼は、善の為に戦う文明国家と言う米国の自任に痛烈な疑念を投げ掛けたが、太平洋戦争勃発前後に反戦主張と体制批判を展開した彼の証言と論評は、60年後に暴露された米英聯軍のイラク俘虜虐待を斬る場合も有効性を持つ。
- 1970年に日の目を見た『リンドバーグ第2次大戦日記』は、日本で4年後に新潮社から新庄哲夫に由る編訳が刊行されたが、2002年に学習研究社で文庫化した際の改題・『孤高の鷲 リンドバーグ第2次大戦参戦記』は、米国が9.11後に発動した本土防衛措置の作戦名・高貴な鷲と結び付けると、歴史の諷刺を感じさせて成らない。本稿註43で高貴な鷲の寓意を推測する手掛りとして、小ブッシュが'03年3月19日の対イラク開戦宣言で出征部隊に語った言葉を挙げた。

「君等が対決する敵は、君等の手腕と勇気を思い知る事に成ろう。君等が解放する人々は、高貴で礼儀正しい米軍精神を目の当りにする事に成ろう。」筆者は其の半月前に始まった米韓合同軍事演習の名・秃げ鷲 を引き合いに出し、攻略と統治、非情と仁慈の対立・統一、表裏の両面を直観したが、連載1回目刊行の1ヵ月余り後に世人の驚愕・憤慨を惹起した占領軍の醜聞は、正に「高貴な鷲」の装いが剥けて「秃げ鷲」の正体を思い知らせた物だ。

高貴な鷲 の深層を更に掘り下げるなら、米国の国章の意匠が思い当たる。其の中央に古代羅馬共和制の表徴・白頭の鷲が描かれ、鷲の胸の縞、矢、頭上の星の数は建国時の13州を表わす。鷲が左手で掴んでいる矢は闘争、右手のオリーブ枝は平和の象徴と成る。口に銜えているリボンには、ラテン語でE Pluribus Unum (多数より1つへ)の標語が記されている。筆者は国旗・国章の意匠を国家の在り方や指向性の縮図と捉えており、別の論考で中国の両者を分析した事が有るが、此の「帝国の表徴」からは米国の戦・和両手(二刀流)や、「一統天下」(天下を統一する)の意志が読み取れる。

「文革」時代の中国の唯一の盟友・アルバニアの国旗・国章も、独立戦争所縁の黒い双頭の鷲の意匠だから、歴史の連環は実に広くて狭い。因みに、其の国旗は米国・西欧に移住したアルバニア人が復活させ、中華民国成立と同じ1912年1月の独立の際に登場したのだ。猶、米国の国旗と国章は其々1777、82年に制定したのだが、2世紀後の華国鋒時代の新国歌制定や鄧小平時代の旧国歌復活と合わせ観れば興味深い。1789年の初代米大統領選出も、世界史の'89年の節目(註359参照)の一環である。

小ブッシュ大統領の「自由イラク」戦勝宣言(2003年5月1日)1周年の折、米・英占領軍の様々な酷い俘虜虐待が暴露されたが、後、冷戦時代と熱戦時代の通底を示す事象として驚くに値しない。洗脳の為フセインに便所の掃除を課した米軍の措置も、「文革」時代の幹部・知識人改造の遣り方に既視感がある。

因みに、『リンドバーク第2次大戦日記』を訳した新庄哲夫の訳書には、オーウェルの『1984年』、李志綏の『毛沢東の私生活』、ウッドワードの『権力の失墜』、フリーマントルの『ユーロマフィア』が有るが、「強邪の枢軸」(筆者の造語)の栄枯盛衰を描破した歴史記録・人間喜劇として纏めて読めば、20世紀の縮図の一片を手にとった気分になる。役者は英米文学翻訳家として知られるが、チャーチル元首相の『第2次世界大戦史』(1948~54年)のノーベル文学賞受賞(1953年)と合わせて、記録文学の歴史的・文学的価値・地位を思わせる。

384) 2001年9月25日、米国防長官は反恐怖活動の海外軍事行動の作戦名・「不屈(不朽)の自由」(Enduring Freedom)を発表した。原案の「無限の正義」(Infinite Justice)は、イスラム教では無限の正義を達成し得るのはアラーの神のみだとされる事から、イスラム諸国の反撥に配慮して変更された。事前に報道機関に漏れて懸念が出た結果であるが、其の意識が当局に欠落していたのは明らかだ。世論や外国への気配りで修正し一件落着したが、絶対的正義の化身を以て自任する意識や姿勢はなかなか変わるまい。

筆者は註43で重要な作戦に立派な名称を付ける米国流に触れ、大統領が'01年10月8日対タリバン政権掃蕩開始を伝える演説で作戦名・不朽の自由 を宣言した事を例に挙げたが、「高貴な(気高き)鷲」(註383参照)の類の名称の高邁な気品に拘る気取りは、此の様に思わぬ落とし穴に陥る危険が伴う。

猶、国防長官は上記の発表で大規模の侵攻は無いと明言し、名称は数年掛かる持久戦の意味合いも込めてあるとした。1年半後のイラクへの全面侵攻は食言になる否かはともかく、イラク抵

抗勢力の不屈な持久戦で其の説明は現実と成った。

- 385) 台湾の作家・評論家の柏楊が1960年代の隨筆で、体制批判と共に伝統文化を「漬け物甕」に譬え槍玉に上げた。
- 386) 「悪の枢軸」(Axis of Evil)と原案の「憎悪の枢軸」(Axis of Hatred)を合成した表現。新聞社幹部が起草した表現からの書き換えは、小ブッシュの好みに拠ったと言う(『NHKスペシャルドキュメント 世界はどこへ向うのか』, 121頁)。
- 387) D&M日経メカニカル編『事故は語る 巨大化トラブルの裏側』, 日経BP社, 2003年, 200頁。
- 388) 「或曰：“以德報怨，何如？”子曰：“何以報德？以直報怨，以德報德。”(『論語・憲問』)
- 389) 尤も、台湾の祝日にも国際労働節(5月1日)と中国婦女節(3月8日)が有る。前者の場合は全民が、後者の場合は職業婦人が1日休暇と成る制度は、其々2日連休、半日休暇とする大陸の長年の慣習と合わせて、海峡兩岸の同根性と微妙な違いを思わせる。対照的に両方とも日本の祝日の内に入らないが、社会体制や文化制度の違いが窺われる。
- 390) 朝鮮では金日成の「封建残滓一掃」の号令に因り、旧正月は1967年に全面的に禁止と成ったが、'86年の金正日の「朝鮮民族第一主義」の提唱が契機で、'88年の旧盆の休日指定に続いて、'89年に寒食・端午と共に民族的名節として復活した。全面禁止の時期と名分は恰度、「文革」の「破4旧」(古い思想・文化・風俗・習慣の打破)と重なるが、中国の旧正月は極左思潮の横行に拘らず無傷に遣った。大陸時代の国民党政権は曾て旧正月を祝日から外して不評を蒙り、中共は逆に民族の伝統を維持し人心を得た。同じ「封建的社会主义」体制の下で朝鮮は中国に比べて、封建時代の名残りの駆除に由る文化大破壊を一層酷く行なったわけだ。尤も、'72年から旧盆の墓参りを許可した事は、朝鮮の二重基準を思わせる。
- 一方、「朝鮮民族第一主義」の指向性と登場時期は、鄧小平の「中国的特色の有る社会主义」「精神文明建設」の掛け声と通じる。金正日は最近「人徳政治」の次元から、70, 80, 90, 100歳を迎える人の為に誕生日祝宴を設ける制度を奨励したが、江沢民の「徳治」の合い言葉との吻合は興味深い。敬老は毛沢東や中共も堅持して来た儒教の徳目であるが、金正日の提唱は自分の還暦を意識した節も有ろう。1999年の旧正月と彼の誕生日が重なった「双慶」(註370参照)で、「民族最大の国家的名節」たる後者が突出した(東アジア総合研究所編訳『聯合ニュース 北朝鮮年鑑 2000年』, 2000年, 208頁)が、人一倍「吉数」や誕生日に拘る彼の事だから、10年後に自分の誕生日が浮き彫りに成る効果を見越した上での復活決定か、と邪推もしたく成る。
- 391) 日本政府は張作霖爆死事件の真相を国民に隠す為、「満州某重大事件」とだけ発表した。情報隠蔽の体質や言語操作の欺瞞は昔も今も中国に勝つとも劣るまいが、「宮中某重大事件」と同じく陰謀の匂いが強い。
- 392) 『幻想交響楽』の創作動機とされる「固定楽想」(idée fixe。中国語訳 = 「固定楽思」)は、或る形象や想念を一定の旋律で表現し、随所に旋律や楽器だけを変化させて使用する手法だ。後にワーグナーの「主導動機」を経てフランクの循環形式の発端と成ったと言うが、別の日本語訳の「固定觀念」の通常の語義と合わせ考えれば示唆的だ。
- 393) 『毛沢東入主中南海』, 312頁。
- 394) 毛は1921年12月に満28に成り、建党の7月には数え歳で28を超えていた。友人募集広告等で使った「28画生」の変名は、画数への拘りに漢字文化の伝統と姓名判断の意識を窺わせ、7×4の28は陰陽思想、佛教、西暦で俱に神秘性を持つ。
- 395) 註259に同じ。

- 396) 「窮則変」は『易経』の言。
- 397) 20世紀の始まりは1900年説と1901年説が有るが、両方の第81年の1981, 82年とも鄧小平体制の本格的発足の時と規定できる。
- 398) 註259に同じ。
- 399) 此等の年が節目と成るのは其々、日中戦争勃発2百周年、中共建国3百周年、洋務運動3百周年、鄧小平体制本格発足3百周年、ソ連解体3百周年、^{マカオ}澳門返還3百周年、中共建党4百周年に当る故だ。
- 400) 自民党は候補者選定基準で比例区単独候補の定年を73歳と定め、2000年初実施の際に数人の閣僚経験者が例外扱いと成った。2003年10月、小泉首相が中曽根康弘(85歳)・宮澤喜一(84歳)元首相に、上記規定に基づいて総選挙での公認辞退を求めた。潔く引退を表明した宮澤に対して、中曽根は「非礼」「政治的テロ」と怒ったが、数日後に世論の圧力で同意を余儀無くされた。政治家の体面意識の強さを思わせる一幕だったが、1年前の華国鋒引退と共に時代の進歩も感じる。特別扱いを享受した華国鋒(註219参照)と違って、中曽根は党内で「老害」と視られたので、後輩首相の荒技も止むを得なかった。

小選挙区比例代表並立制が初めて実施された1996年に、橋本龍太郎総裁は群馬県内の候補者調整で、中曽根康弘が小淵恵三・福田康夫に小選挙区を譲り比例区に回るという裁定を出し、執行部は補填として「北関東ブロック最上位とし終身処遇する」と約束した。党の公式な保証も簡単に反故と成ったのは信用に関わるので、中曽根の立腹と不服は無理も無い。尤も、文書に由る権力譲渡の密約も自民党総裁選で守られなかった前例を思い起すと、日本の政治文化乃至精神風土の異質性が感じ取れる。目先の利益の為に長期的優遇を保証して置き、後は前任者の勝手な所為にして約束を破って^{しま}了う流儀は、顧客を釣る証券会社の営業手法や国民を欺く政府の年金制度等に通じる。

曾て朱鎔基総理は両国の歴史認識の相違に就いて、日本は一度も中国に対して文書で過去の侵略戦争を謝罪した事が無いと苦言を呈した。如何にも「文章の国」(司馬遼太郎の言)らしい不満であるが、文化の溝が埋まらない限り同じ次元で期待しても空しい。協定を直ぐ破る事の形容に使う中国流の「墨跡未乾」(墨汁[筆跡]が未だ乾かわぬ内)に対して、日本流の「舌の根の乾かわぬ内」は誓文調印の伝統の浅さを思わせる。中国と同じ印鑑文化を有する日本では、独特の実印・三文判の「一人二印」制に因り、継承されぬ「輕承」(気軽な承認・承諾。語呂合わせに因んだ筆者の造語)は、空気めく常識に由って黙認・公認されている。

小泉首相が強硬突破で中曽根元首相を引退させた事は、結果的に制度の健全化に貢献したとしても、党の正式決定を覆した事に関する総括・反省の欠落の故に、当事者間の悪い後味よりも遥かに拙い禍根が遺った。巡り巡って、彼の2度目の訪朝(2004年5月22日)は中曽根等から「輕率」と批判されたが、初回の訪朝で拉致被害者を連れて帰国した「戦果」も、手放して賞讃するわけには行かない。約束通り朝鮮に返さず「背信」の非難に甘んじたのは、情に適った「此一時也、彼一時也。此亦一是非、彼亦一是非」としても、『平壤宣言』破棄の口実を与えて^{しま}了い得策とは思えない。其の場凌ぎの方便として安易に手形を渡すのでは、小利の為に大義を無視し最後に大利を潰しかねない。

外交の相互主義に背いた単騎・単軌の突入と其の失敗は、日本的短期思考と小泉の短気な性格を考えれば必然性が有る。「人無遠慮、必有近憂」(人は深謀遠慮が無ければ、近い内に必ず憂慮すべき事態に遭う)、と言う中国の諺は又も証明されたが、拉致被害者の返還は当初想定し得た

事なので、取り敢えず押えて置こうとの心理だったかも知れない。今回は拉致被害者家族会から「もっと対決して欲しかった」との怒りが噴き出たが、「一勞永逸」(一回苦勞して永遠の安逸を得る)を図る心・技・体が無く、姑息で一難を逃して直ぐ新たな一難を招いた結末は、中曽根の処遇を巡る自民党首脳部面々の小手先の対応も一緒だ。

日本で議員定年の上限が半端な73歳と成るのも、自らの年金未納問題から国民の視線を逸らせる党の為2度目の訪朝を急いだ小泉の挙動と同じく、特定の間人への特別な配慮の疑いが持たれる。中曽根と華国鋒の超法規的優遇と其の後の不承不承の承認・解消は、東洋の政治に於ける利益配分の困難さを物語っている。其の困難の根源は「情面」(感情・体面)重視の精神風土にも在り、終身現役に対する政治家の執心にも在る。2002年に発足した中国の党・政府の3選禁止の新制度は、不朽願望の強い国柄に照らして画期的進歩と言って能い。定年制の導入と厳正実施、及び年齢基準の線とも中国は日本より一歩進んだが、民主の伝統の深浅を考えれば大きな開きとも思える。

群馬は福田・中曽根・小淵等の首相級政治家が^{ひしめ}激戦区で、「犇」の字形通り3者「頂牛」(対抗)の激戦は避けられない。池が小さく大魚の同居が不可能な故に、無理な利害調整も理外の理を持つ。翻って、過渡期の此の2件の二重基準は、「水至清、無大魚」(水清ければ、大魚棲まず)の逆説で正当化できよう。周囲から恣憑されたとは言え「4人組」逮捕を決断した華も、1983年に日本首相として初めて先進7ヶ国首脳会議の記念撮影の真ん中に割り込んだ中曽根も、間違い無く歴史の大物立て役者である。其の「不沈の航空母艦」の退場は皮肉な観方をすれば、「大魚」の不在・不要の時代の到来をも意味するが、自らの年齢に合わせて変則的線引きの時機を設定した江沢民にも、「大元老」・中曽根並みの謀略・規模を備えた器が見受けられる。猶、内規にして置いて事でも中共は自民党より一枚上の観が強い。橋本総裁等が誓約を立てた事は逆に党の信任を損なったが、「水」(条件)の透明度が高過ぎて「大魚」(大義)を駆逐する結果だった。江沢民流の曖昧糊塗は逆に、清濁合わせて呑む大欲・大器の表現^{あらわれ}と思える。

- 401) 間も無く天帝に招かれて行く云々の予告を、毛は其の3年前の田中角栄との会見でも発し、日本側は儀礼を考慮して公表しなかったが、金日成に語った中身は遥かに迫力が有る。彼は董必武の逝去や周恩来・康生の重病を挙げ、「上帝請我喝燒酒」(天帝は私に焼酎を奢る)と言った(『毛沢東之謎』、215頁)。天帝と焼酎の対は唐突であり彼は酒を飲まぬ体質なので、恍惚・毫碌の戯れ言に響いて成らない。
- 402) 『毛沢東之謎』の「九・九之謎」(87～92頁)では、1949年の北京入城は9月9日ではなかったとしながら、此を含む毛の生涯の3回の“9.9”の節目を論じた。
- 403) 「表徴の帝国」は仏蘭西の記号学者・R.ロランの哲学的日本考察記(1970年)の題(日本語版=宗左近訳、新潮社、1974年)。前出の「原風景」(註347参照)に引っ掛けた此の見立ては、日本国会の人・物・事を記録した「国会原風景」(写真・文=元首相官邸写真室カメラマン・久保田富弘。『文藝春秋』2004年4月号)にも因む。
- 404) 日本語訳=竹内実(『毛沢東 その詩と人生』、100頁)。
- 405) 筆者が今年2月に^{タイ}泰を旅行した際、現地の案内人が観光バスの中で日本人客集団に、日本の国花は何ですかと訊ねた。訊かれた方は虚を突かれ答えが出なかったが、聞き手は嬉々として「菊」と披露し皆を納得させた。此の様に日本の国花は自国でも認知度が低く、『広辞苑』の「日本」の項にも国花の説明は無い。小学館『日本大百科全書』第17巻(1987年)の「日本」の項では、国花は菊・桜と説明されているが、面白い「1国2花」である。

- 東京書籍編集部編『最新世界各国要覧(11訂版)』(東京書籍, 2003年)では,日本の国章は菊花紋,国花は山桜とされている。小泉首相が此の頃に山桜の和歌を持ち出した事を考えれば頷けるが,中国の国花は牡丹で国樹は梅,台湾の国花は梅と牡丹,と言った記述を観ると怪しく感じた。
- 406)『新古今集』の共撰者として有名な鎌倉前期の歌人・藤原定家の言。詩歌に「紅旗」を愛用し征戎を天与の大任とした革命家・詩人の毛沢東の心性,戦乱が永遠の主題を成す中国文学の精神とは,正に対蹠に在る姿勢である。
- 407)拙論「現代中国の統治・祭祀の“冷眼・熱風”に対する“冷看・熱読” “迎接新千年”盛典を巡る首脳と“喉舌”の二重奏と其の底流の謎解け(1・2)」(註124文献)参照。
- 408)全人代が閉幕した2004年3月14日の記者会見での発言。当日「人民網」(『人民日報』運営の「網站」[サイト])の「滾動新聞」(即時更新ニュース)に拠る。
- 409)註404文献,166~167頁。
- 410)「詞牌」と同じ系列の中国語独特の語彙には,「招牌」(看板),「牌号・牌子」(屋号。商標),「名牌」(ブランド)等がある。トランプのカードや麻雀の用具にも言う「牌」は,虚実,表裏の両面を持つ。
- 411)中共中央文献研究室編『毛沢東詩詞集』,中央文献出版社,1996年,54頁。
- 412)毛沢東は自分を「虎気・猴気」の複合体と分析したが,猿の気質の祖型は愛読の『西遊記』の「美猴王」と思える。石塊の「内育仙胞」の「迸裂」で飛び出た孫悟空の誕生物語は,「石女」を介して西洋の処女懐胎伝説を連想させるが,人間の血・肉との断絶は中国的硬派の孤高さらしい。
- 413)註404文献,169頁。
- 414)宋の黄昇が『唐宋諸賢絶妙詞選』の中で「百代詞曲之祖」と注したのは,上記の「憶秦娥」と次の「菩薩蛮」である。「平林漠漠煙如織,寒山一帶傷心碧。暝色入高楼,有人楼上愁。玉階空佇立,宿鳥歸飛急。何處是歸程,長亭連短亭。」李白作とされた此の2首は明の胡應麟の指摘から,後人の仮託と視られている。
- 415)『角川大辞源』の「詞」の字解は,「形声。意符の“言”(ことば)と,音符の司(つなぐ意=嗣)とから成る。つないだ“ことば”の意」と言う。『易経』の重要な一部を成す「繫辞」の字面と暗合するが,「嗣」の継承の積み重ねと共に読み取れる「言+司」の重みは,「辞令」と繋がる言語の司令塔的役割にも在る。

“9.11”恐怖襲擊的種種既視感()

本部分首先注目中共黨、國的若干大事與內外歷史事件的日期重疊或整10年、百年單位的間隔，從中確認漢語“革命”和英語 revolution 含義所共有的時間循環周期。“年年歲歲花相似，歲歲年年人不同”的不易與變易，使“往來成古今”的人事代謝成為後事、後世的借鑑或預言。往往先以悲劇、後以喜劇形式重演的歷史，在演變過程中形成及繁衍了年輪、遺傳基因，由此而來的既視感又具有生成、蓄積、派生、再現和更新、變異、淡化、消失兩面。

筆者做“地緣政治緊張”提出“地緣文化緊張”概念，用來解釋華南成為“非典”或人、禽大流感的發源、發生等現象；又由唐山等處事例顯示的大地震頻發的北緯40度地區“恐怖線”，引伸出政治、經濟、社會等地殼變易集中的“歷史時緣緊張”。以“災難軸心”的時空兩面的“動蕩等高線”為線索，進而在縱觀歷史和全球時發現各種領域的多種等高線，如分別以年齡、時代、意識形態、發展段階等劃分的“世代等高線”、“年代等高線”、“體制志向等高線”、“貧富、強弱等高線”。等高線相連的人、區域或現象之間的大同小異，及不同等高線層面之間的先行、後來者間的遞進式推移，也產生出形形色色的既視感。

筆者進而將既視感分為多種類型，如原本存在和後天轉換、自然形成和人為造就、實存和“擬（疑）似”（虛幻）等。從溫家寶引毛沢東詞的“而今邁步從頭越。從頭越”的“蟬聯體”、“蜘蛛體”，推想出繼承、發展祖型的“伏線”（伏筆）、“複線”（雙軌）。還指出既視感在具備“固定樂思”式基調作用的同時，也有作為強迫觀念束縛心理、乃至誘發“負的連鎖”的一面。

(XIA, Gang 本學部教授)